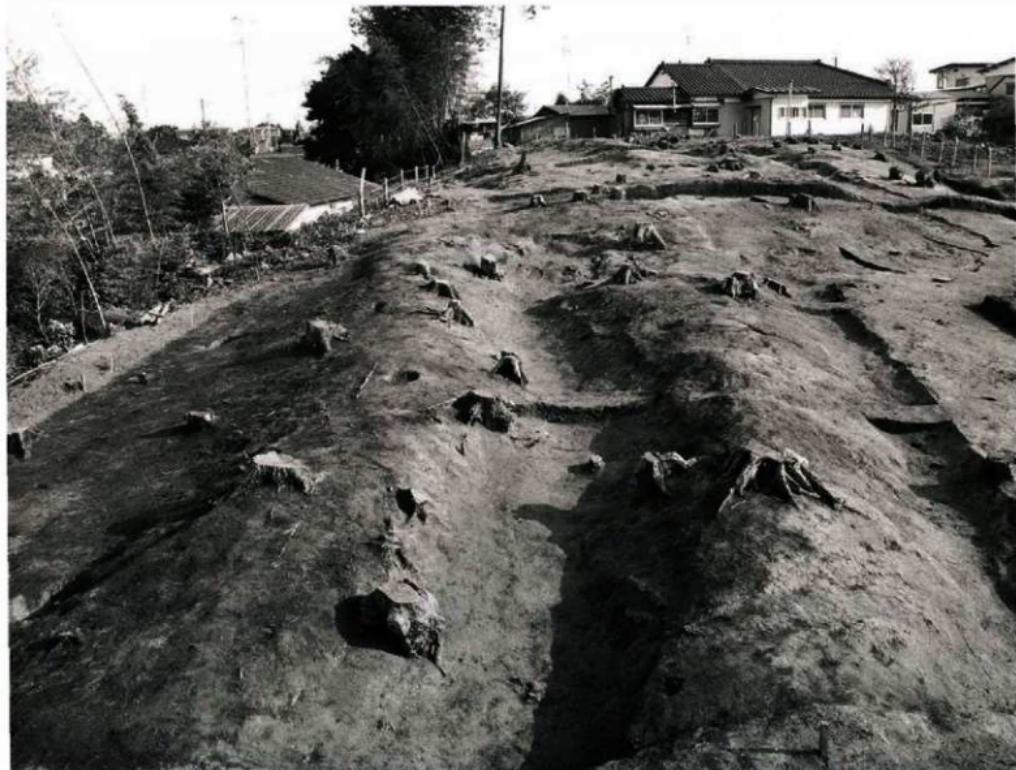


留ヶ谷遺跡

—第1・3次調査報告書—



平成10年3月

多賀城市教育委員会

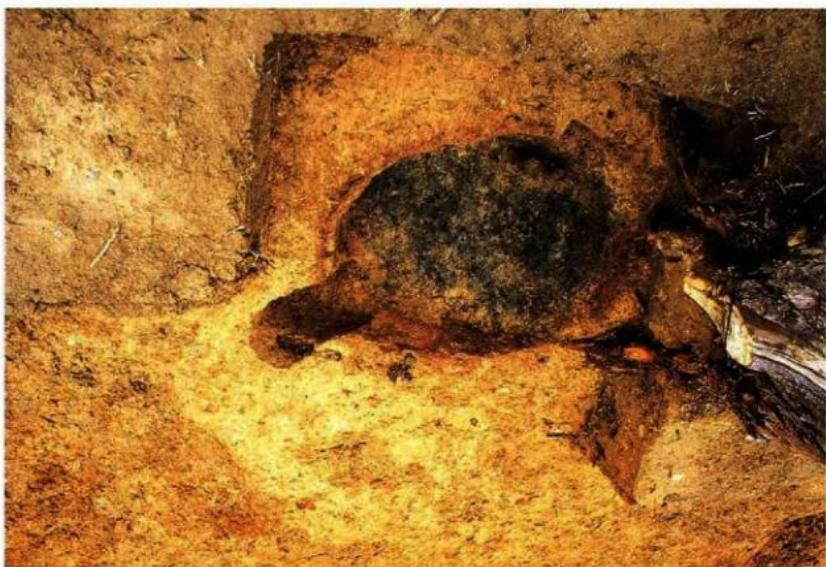
留ヶ谷遺跡

—第1~3次調査報告書—

平成10年3月

多賀城市教育委員会

下 地下土窑(窑1火道窑)
上 土窑火道(窑1火道窑)



御文庫所藏書目

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	13	14	15
野	田	信	介	多	賀	義	三	源	義	忠	小	此	此	此
原	元	信	義	義	義	義	義	義	義	義	此	此	此	此
大	日	北	國	山	王	源	三	源	義	忠	此	此	此	此
内	總	統	總	山	源	三	源	義	義	忠	此	此	此	此
32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
内	総	統	總	山	源	三	源	義	義	忠	此	此	此	此
内	總	統	總	山	源	三	源	義	義	忠	此	此	此	此
内	総	統	總	山	源	三	源	義	義	忠	此	此	此	此
内	総	統	總	山	源	三	源	義	義	忠	此	此	此	此

序 文

留ヶ谷遺跡は、土壘・空堀が良好に残存する市内では数少ない遺跡であります。昭和60年度に実施した第1次調査ではそれらの構造を明らかにし、この遺跡が中世の武士階級の館跡であることを広く印象づけました。また、翌年に実施した第2次調査では、中世の館の一部が近世には屋敷として利用されていたことが判明し、本市の近世史に貴重な1ページを書き加えました。

今回の調査は、市道の改良工事に先立って実施したものであり、本遺跡においては3回目の調査であります。狭い範囲を対象としたものではありましたが、平安時代の土壌や溝を発見するなど様々な成果を挙げることができました。詳細については本文に譲るとして、これまで本遺跡の中であまり明らかではなかった古代の情報を得るという大きな成果を収めました。本遺跡に関するデーターがまた一つ蓄積された訳であり、本市の文化財に携わる者として大変喜ばしく思う次第であります。

なお、本書には第1次調査の成果もあわせて収録致しました。同調査については、諸般の事情から正式な報告書を作成することがかなはず今日に至ったものであります。この度関係各位の御理解を得て、このような形をとることができました。多くの方々に本書が活用されることを切に望むものであります。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご指導・ご協力を頂戴した関係者および関係諸機関に対し、衷心より御礼申し上げます。

平成10年3月

多賀城市教育委員会

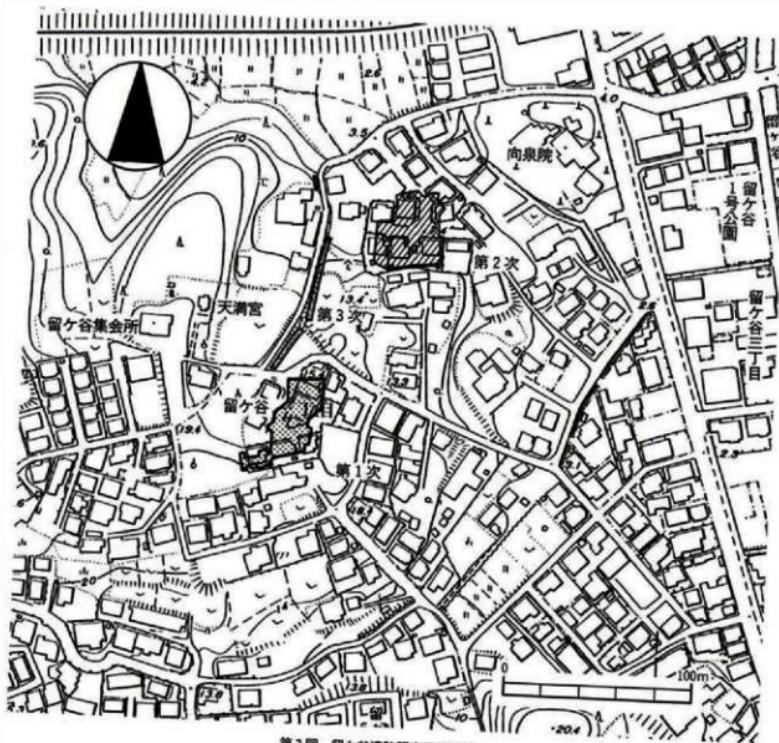
教育長 櫻井茂男

例　　言

- 1 本書は、昭和60年度に実施した留ヶ谷遺跡第1次調査と、平成9年度に実施した同遺跡第3次調査の成果をまとめたものである。
- 2 遺構番号は第1次調査からの一連番号である。
- 3 本書で使用した遺構の分類記号は次のとおりである。
S □ : 溝跡　SK : 土壙　SX : その他の遺構
- 4 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用して設定している。
- 5 掘図中の高さは標高値を示している。
- 6 瓦については宮城県多賀城跡調査研究所の分類に従った（宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』1982）。
- 7 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。
- 8 本書の作成にあたり、入間田宣夫氏（東北大学教授）には中世の歴史的環境について、丹羽茂氏・柳沢和明氏（宮城県多賀城跡調査研究所）には古代の遺物について御教示頂いた。
- 9 本書の執筆は次のとおりである。
I 一高橋圭蔵、II 1～7、9一千葉孝弥、II 8～山川純一、III 1、3～車田 敦、III 2～高橋圭蔵
III 4、5～高橋圭蔵、車田 敦、三浦幸子、IV 一千葉孝弥
編集は高橋が行った。
- 10 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

序文	6	遺構の変遷と年代	26
例言	7	焼土土壙について	28
目次	8	出土遺物について	28
I 遺跡の位置と環境	9	まとめ	32
1 位置と地理的環境	III 第3次調査	33	
2 歴史的環境	1 調査要項	33	
II 第1次調査	2 調査に至る経緯	33	
1 調査要項	3 調査方法と経過	33	
2 調査に至る経緯	4 発見した遺構と遺物	35	
3 調査方法と経過	5 遺構の年代と分布	40	
4 層序	6 まとめ	41	
5 発見した遺構と遺物	IV 考察	42	



第3図 留ヶ谷遺跡調査区位置図

II 第1次調査

1. 調査要項

遺跡名	留ヶ谷遺跡（宮城県遺跡登載番号18047）
所在地	宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目330番1
調査面積	1,300m ² （対象面積2,380m ² ）
調査期間	昭和60年4月20日～7月3日
調査主体	多賀城市教育委員会 教育長 玉蟲 譲
調査担当	多賀城市教育委員会 社会教育課文化財保護係
調査員	高倉敏明 滝口 卓 石川俊英 石本 敬 千葉孝弥 相沢清利
調査協力	留ヶ谷地区集会所
調査参加者	赤間かつ子 阿部敏子 阿部トシ子 阿部美智子 阿部美津子 塚保敏子 浦山一馬 遠藤一代 小野玉乃 黒崎庸治 後藤はつみ 桜井栄子 桜井三千夫 佐々木四郎 佐藤節子 佐藤たま子 佐藤東三 下道博信 菅原絹代 鈴木 効 高野敏子 千葉享一 角田静子 鶴巻まき子 早坂えみ子 渡辺園恵 渡辺ゆき子 (遺物整理) 滝口裕子 我妻悦子 柏倉霜代 須藤美智子 熊谷純子 黒田啓子
分布調査	調査期日 昭和59年9月19日
	調査員 高倉敏明 滝口 卓 石本 敬
試掘調査	調査期間 昭和59年11月6日～11月17日
	調査面積 80m ²
	調査員 石本 敬 千葉孝弥

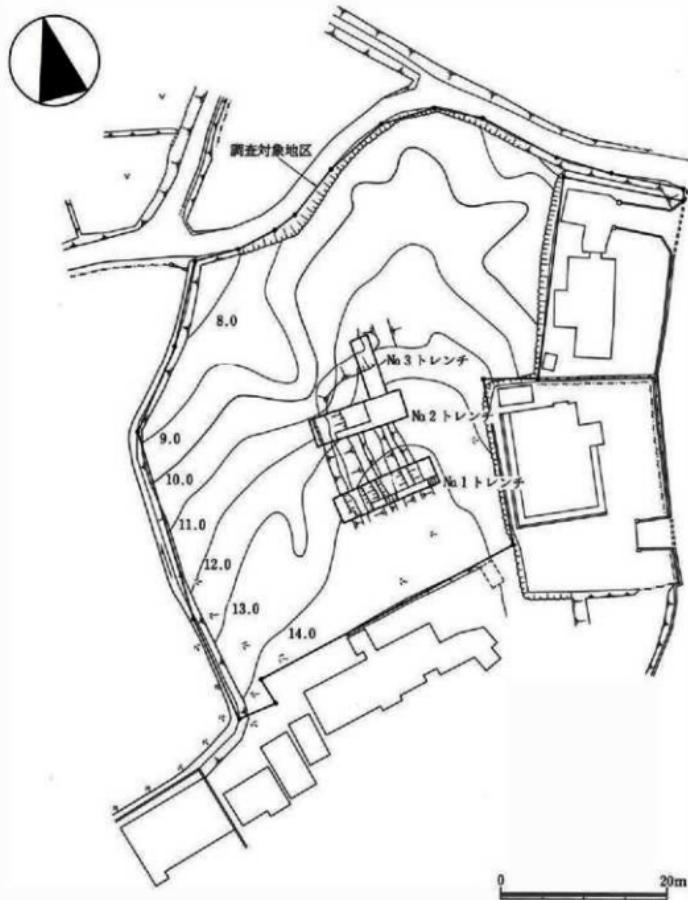
2. 調査に至る経緯

本調査は、株式会社瀬戸建業（多賀城市留ヶ谷三丁目6-3）による当該地の宅地造成計画に係る事前調査である。

この件について、昭和59年7月4日付で都市計画課長から社会教育課長にあてて開発行為に係る事前協議について照会があった。これに対し、社会教育課では、当該地が埋蔵文化財包蔵地である高崎遺跡に含まれることから、提出された計画書にもとづく土木工事に当たっては事前に当課との協議が必要である旨指導するよう回答した。同年9月12日、株式会社瀬戸建業から教育委員会にあて、開発計画のため当該地の埋蔵文化財の有無について協議の依頼があった。これを受けて、社会教育課では9月19日に開発計画予定地内の分布調査を実施し、2条の土壌状の高まりとそれに並行する空堀状の落ち込みを発見した。これらは、予定地北側の切り通しにおいても確認することができた。予定地内は雑草が繁茂していることから遺物は採集できなかったが、周辺の畠地からは古代の土器類を数点採集することができた。さらに詳細な資料を得ることを目的として、11月6日から17日にかけて試掘調査を実施した。土壌や空堀の状況を見るため、東西トレント2条、南北トレント1条を設定し、約80m²の調査を行った(第4図)。この調査において土壌・空堀の構造が把握され、さらにそれらの下層遺構の存在を確認するなどの成果を挙げた。これを

ふまえ、株式会社瀬戸建業に対し、11月28日付で開発の際には発掘調査が必要であることを通知した。その後、調査期間・費用に関する協議を行い、双方の同意が得られたため、4月22日付で地権者鈴木いと(多賀城市留ヶ谷一丁目14-1)から正式に発掘調査の依頼書が提出された。発掘調査に係る一切の費用は地権者の負担によるものとし、昭和60年4月30日から6月30日まで約2カ月間の予定で調査を実施することに決定した。

なお、当該地から向泉院にかけての丘陵上には土壘・空堀などの遺構が何箇所かで確認されている。これらは通常館跡に顕著に見られるものであることから、今回の調査を契機としてそれらの存在する東西約



第4図 試掘調査トレンチ配置図

150m、南北約350mの範囲を高崎遺跡から分離して「雷ヶ谷館跡」と登録し、その後「雷ヶ谷遺跡」と改めた。



第5図 試掘調査前の状況



第6図 試掘調査

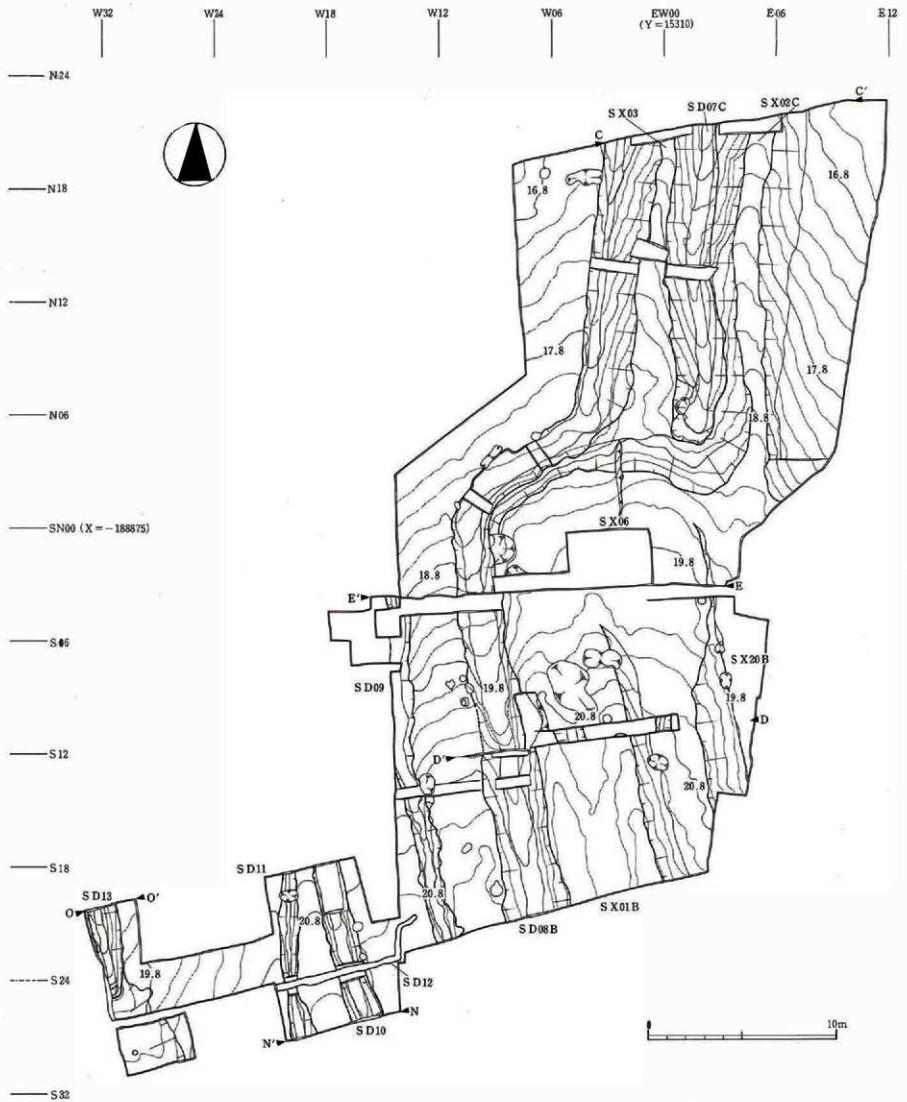
3. 調査方法と経過

(1) 調査方法

対象地区の内、確認調査で土壘・空堀を発見した中央部から東側にかけての北斜面に調査区を設定した。最も低い北東部は遺構の存在が希薄と予想され、土捨て場とした。土壘・空堀の関係を把握するため、試掘調査のNo1・2トレントを利用して東西方向のセクションベルトを2箇所設定し、その他は全体的に表土を除去した。その後、遺構がさらに西側にも存在することが予想されたため、南西隅に東西トレントを設定し（南西拡張区）、遺構の検出を行った。遺物の取り上げについては、便宜的に調査区南半部をA区、北半部の内のさらに南半分をB区、それより北側をC区として行った。

実測図の作成にあたっては、本調査区が傾斜地にもかかわらず同位置で何回かの改修が予想されたため全体に造り方を設定した。縮尺は平面図・断面図ともに20分の1であり、平面図には20cm間隔の等高線も同時に記入した。なお、遺構の全体像を早急に把握する必要性から、造り方実測に先行して100分の1の縮尺による平板実測も行った。

(3) 第1次調査区における古代の遺構の存在と、その周辺にも古代の遺物が広く散布することから複合遺跡とした方が適切であるという結論に達し、名称を改めた（「雷ヶ谷遺跡（第2次調査）」多賀城市文化財調査報告書第14集『年報1 昭和61年度』1987）。



第7図 造構全体(2)(1)

W32

W24

W18

W12

W06

EW00
(Y=15310)

E06

E12

N24

N18

N12

N06

S N00

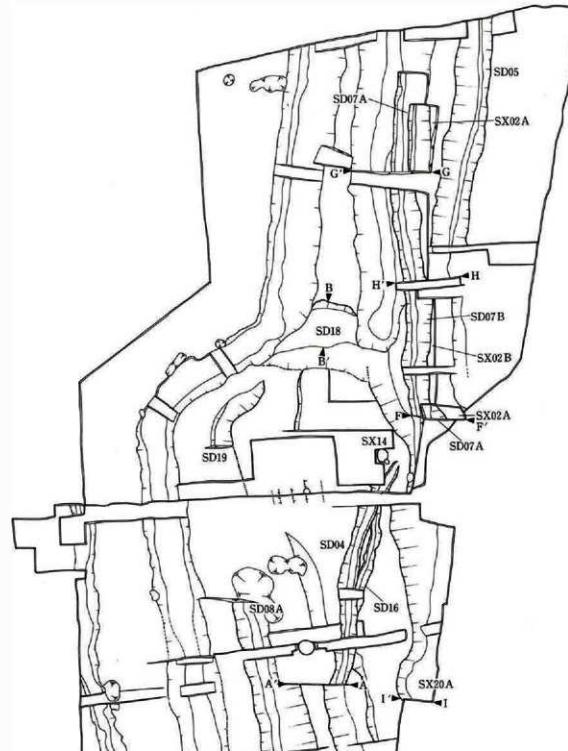
S06

S12

S18

S24

S32



第8図 通構全剖面図(2)

遺構写真は35ミリのモノクロフィルムとリバーサルフィルムで撮影し、必要に応じて6×7センチ版モノクロフィルムとリバーサルフィルムで撮影した。

(2) 調査経過

今回の調査は4月24日から7月3日まで、実働51.5日間実施した。要した人員はのべ1,045人である。調査経過については以下のとおりである。

- 4.24 重機による表土除去開始 (~25日)
4.26 基材搬入
4.30 作業員が加わり、人力による表土除去開始
5. 1 東西方向のセクションベルト2箇所に設置。南側3分の1の表土除去終了
5. 9 土壌の西側をぐる南北溝検出 (SD08)
5.13 調査区南東部の段築の状況を見るため一部拡張。トラバース測量開始
5.15 調査区西側斜面の第II層を掘り上げ、SD08のプラン検出。調査区北端部の切り通しの断面で土壌積土の状況を検討。地山上にある黒色土が積土か旧表土かが問題となる
5.16 SD08堆積土の掘り下げ作業開始 (~5月27日)。トラバース測量終了
5.21 平面図作成のための基準点設定 (~22日)。平板実測 (~22日)
5.24 SD07プラン検出。堆積土の掘り下げ (~27日)
5.27 整地層Bとの関係を見るため、南東部の段築の部分を東側に拡張
5.28 全景写真撮影。遠方設定開始 (~6月5日)
5.29 南西溝から西側にかけて東西に長く拡張区を設定(南西拡張区)
- 5.30 南西拡張区で南北溝2条検出 (SD10・11)
5.31 南西拡張区西端で南北溝1条検出 (SD13)。本日までに調査区内の上層遺構の確認終了
6. 5 南西拡張区を調査区南端まで拡張。東西溝検出 (SD12)
6. 6 上層遺構の平面図作成開始
6.12 SD09の在り方を見ため一部拡張
6.14 SD07南端部周辺の精査
6.15 SD09は第II層に覆われていることを確認。SD07南端部の西側において東西方向の落ち込みを確認(のち、SD08Aの一部と推定)。調査区北東の状況把握のため北壁にトレントを設定
6.17 北壁トレントで南北溝検出 (SD05)
6.22 整地層BとSX02との関係を検討
6.24 調査区南東隅の整地層B除去。SD04がSX01Aの下に入り込んで行く状況を確認。
S X02・SD07の打ち削り調査 (~7月3日)。それぞれ古段階の状況を確認し、部分的に段階ごとに掘り進める
7. 3 整地層および土壌の下のSX14・15の調査。すべての調査終了

4. 層序

調査区中央部においては南北に土壌が延びており、表土を除去すると直ちにその積土やそれに関わる整地層A・Bが現れた。土壌の西側や南西拡張区では第IIIa・IIIb層を発見した。これらは直接的な上下関係がないため、新旧関係を明らかにできなかったものが多い。

- 第I層 表土
第II層 にぶい黄褐色 (10Y R5/3) 砂質土。
南西拡張区で地山上に堆積している。
現代の陶磁器等出土。
第IIIa層 にぶい黄褐色 (10Y R4/3~5/4) 砂質土。S-12ラインから北側に分布。
この上面はSD08Bの確認面となっている。SD09を覆っている。
第IIIb層 にぶい赤褐色 (5Y R4/3) 砂質土。
南西拡張区の西側斜面にのみ分布し、
第II層に覆われている。硬く縮まっている。遺物は出土していない。
第IIIc層 にぶい黄褐色 (10Y R4/3) 砂質土。



第9図 堆積層・整地層の分布

S X02の東側にのみ分布し、SD 05を覆っている。

- 整地層A 褐色(10Y R4/4)砂質土。調査区南端部からS-12ラインまで分布。この上面はSD 08Bの確認面となっている。中世の無釉陶器が出土している。第III a層との関係は不明。
- 整地層B 黒褐色(10Y R3/1)砂質土。SX 01の東側に分布し、それを覆っている。

5. 発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、土塁3条、溝12条、土壙1基、焼土土壤2基である。以下、(1)土塁とその関連遺構、(2)土塁以前の遺構、(3)土塁との関係が不明な遺構の順に説明する。

(1) 土塁とその関連遺構

① SX 01土塁とSD 08溝跡

SX 01は緩やかな丘陵北斜面に構築されている土塁である。調査区南端部から中央部にかけて南北にのびている。SD 08はその西側に沿って延びている溝である。それぞれ1回の改修が認められる(A→B)。

【SX 01A・SD 08A】SX 01AとSD 08AはいずれもSX 01Bの積土によって完全に覆われている。部分的な調査にとどまり、平面的にはそれぞれ8.5m検出したにすぎない。

SX 01Aは地山上に直接構築されたもので、厚さ10~30cmのいぶい黄褐色土と黒褐色土がほぼ水平に積み上げられている。⁽⁴⁾ SD 04・SX 15と重複し、それより新しい。方向は北で約14度西に偏している。基

A) H=21.80m

—A'



No	土色	土性	層号	種別
1	黄褐色10Y R5/6	砂質土	しまりあり。	
2	黄褐色10Y R5/8	砂質土	粘性・しまりあり。	
3	黄褐色10Y R5/6	砂質土	粘性やもあり。	
4	褐色10Y R4/6	砂質土	ボゾリの土。	
5	褐色7.5Y R4/6	砂質土	地山を含む。粘性・しまりあり。	
6	褐色7.5Y R3/4	砂質土	地山を含む。粘性・しまりあり。	SX 01A構土
7	褐色7.5Y R4/4	砂質土	地山を含む。武化物を含む。	
8	褐色10Y R4/6	砂質土	硬くしまっている。	SD 08構土
9	黄褐色10Y R5/6	砂質土	地山ブロック含む。粘性あり。硬くしまっている。	

B) H=18.80m

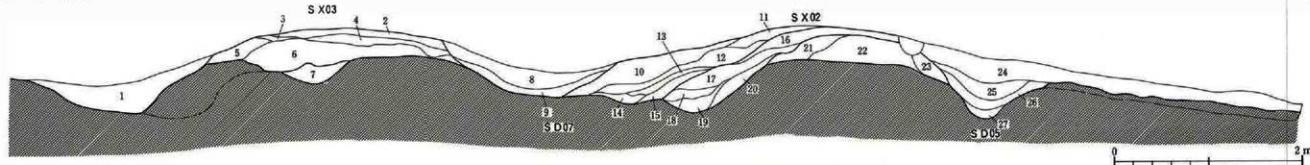
—B'



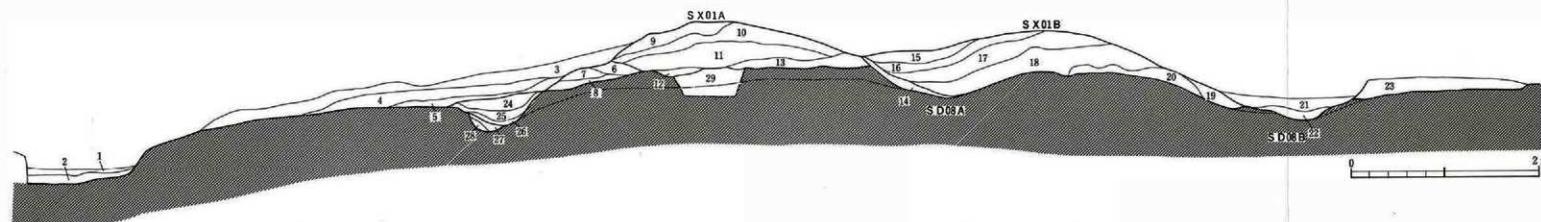
第10図 SX 01A・SD 08断面図

(4) この土塁については、S-11.5、S-14ラインの断面観察によると明瞭な積み手の違いが観察される(第10-11図)。S-14ラインにおいては、東側から土塁側に向かって斜めに堆積している状況が顕著であることから崩壊土の可能性は考えられない。平面的には確認できなかつたが、A・B 2時期の変遷以外にも更に細分される可能性を指摘しておきたい。

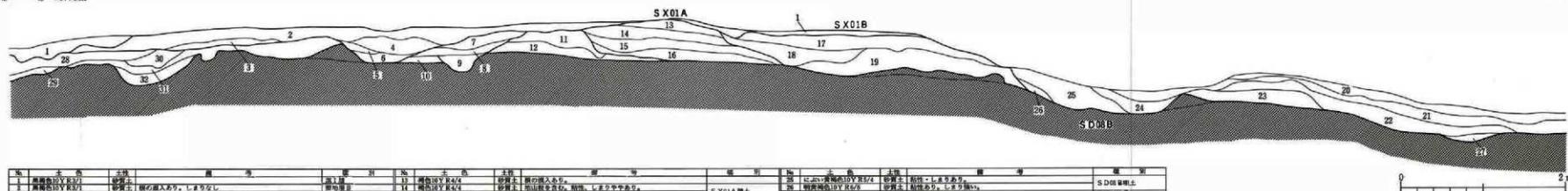
C———L = 17.60m



D———L = 21.80m



E———L = 20.40m



No.	土名	性質	直角	直角	直角	直角	直角	直角	直角	直角
1	黒褐色Y R4/2	堅硬の入あり。		10	黒褐色Y R4/2	堅硬の入あり。		19	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
2	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		11	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		20	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
3	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		12	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		21	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
4	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		13	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		22	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
5	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		14	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		23	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
6	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		15	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		24	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
7	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		16	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		25	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬・しまりやあり。
8	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		17	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		26	にじむ黒褐色Y R4/2	堅硬に押すとくずれる。
9	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		18	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。		27	黒褐色Y R4/2	堅硬・しまりやあり。
10	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		19	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
11	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		20	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
12	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		21	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
13	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		22	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
14	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		23	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
15	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		24	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
16	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		25	にじむ黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。堅物・しまりやあり。				
17	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		26	黒褐色Y R4/2	堅硬の入あり。				
18	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。		27	黒褐色Y R4/2	堅硬の入あり。				
19	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
20	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
21	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
22	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
23	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
24	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
25	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
26	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								
27	黒褐色Y R5/2	堅硬の入あり。								

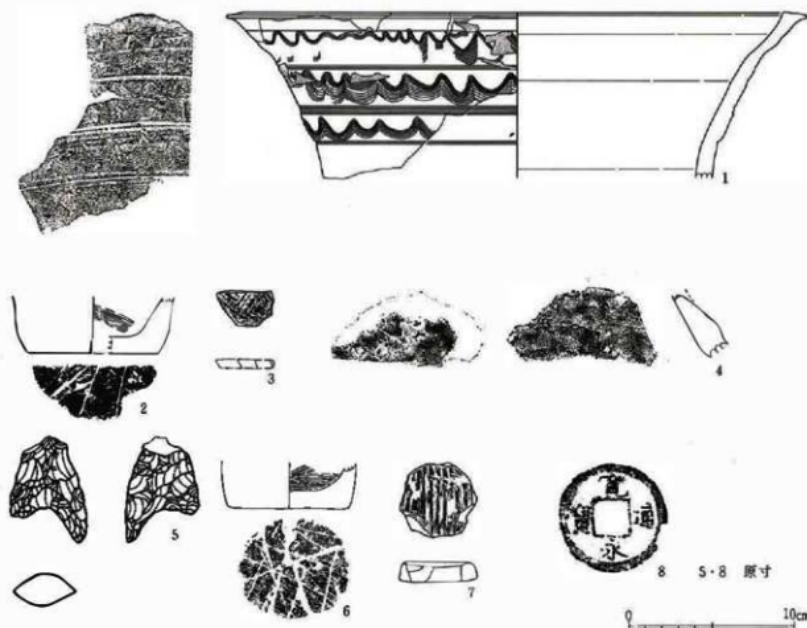
第11図 SX01・SD08断面図

底幅は3.5m、高さは0.5mである。遺物は、積土から須恵器甕、赤焼き土器高台杯、鉄滓が出土している。

S D08Aは地山面で検出した。規模は、幅1.5~1.8m、深さ30cmである。S X01A土壙頂部との比高差は0.8mである。

【S X01B・SD08B・SD18・SD19】S X01BはS X01Aを拡幅して構築された土壙である。南北約14mにわたって確認した。SD08BはS X01Bおよびその北東部に位置するS X03の西側に沿って延びている溝である。直線距離にして42m確認した。

S X01BはS X01Aの西壁側にのみ積土が施され、西側に大きく拡幅されたものである。これによって



番号	種類	遺構	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器甕	S X01B	積土	【外】3段の沈線・彫描き波状文 【内】ロクロナデ	(34.8)			R-2	11-2
2	土器部甕	S X01B	2層	【外】体部：不明、底部：木葉痕 【内】ユビナデ		(7.7)		R-6	
3	円盤状土製品	S X01C	積土	須恵器甕の体部破片を利用				R-15	
4	無釉陶器甕	S X01C	積土	【外】自然釉、オーリーブ褐2.5Y4/4 【内】指頭圧痕→ヨコナデ、灰NS5/ <胎土>浅青2.5Y7/4				R-36	
5	石器	SD08B	1層	無茎、黒曜石製				R-63	11-5
6	土器部甕	SD08B	2層	【外】体部：不明、底部：木葉痕 【内】ユビナデ		(7.2)		R-5	
7	円盤状土製品	SD08B	2層	須恵器甕の体部破片を利用				R-13	
8	占継寛永通宝	SD08B	2層					R-13	

第12図 SX01・SD08出土遺物

S D08Aは完全に埋められている。積土は、S D08Aの西側の高い方から低い方へ斜めに積まれている。この積土はS D08Aの西側では高さ45cmであり、S X01Aの頂部より約10cm低い。また、S X01AとS X01Bの最も高い部分との間、すなわちS D08Aの上は浅い溝状の窪みとなっている。遺物は、積土から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、無釉陶器甕、円盤状土製品が出土している。土師器甕には底部に木葉痕のあるものがある(第12図2)。須恵器甕は頸部に3段の沈線と波状文を巡らされたものが出土している(第12図1)。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである(第12図3)。

S D08BはNo.1トレンチでは整地層A上面、No.2トレンチでは第III層上面で検出した。壁は緩やかに立ち上がりっている。埋土はNo.1トレンチでは土壌側から強く流れ込んだ状況である。No.2トレンチでは第I層が堆積した時点でもまだ窪みを残している。規模は、幅1.8~2.0m、深さ30~54cmである。S X01B土壌頂部との比高差は0.9~1.2mである。遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、古銭「仙台通宝」、不明鉄製品、不明銅製品、石鏡が出土している。石鏡は無茎タイプであり、黒曜石製である。2層から土師器杯・甕、古銭「寛永通宝」、円盤状土製品が出土している。土師器甕は非クロ調整であり、底部に木葉痕がある(第12図6)。円盤状土製品は須恵器甕の体部を加工したものである(第12図7)。

S D19はS X01Bの北端部においてその積土下から発見した溝である。S D08Bによって西側が破壊されている。平面的にはわずか4.5m検出したのみであるが、南北溝であり、N-1ライン付近で大きく東側に屈曲して北側に延びている。規模は、幅1.5m以上、深さ39cmである。壁の立ち上がりは緩やかであり、埋土は土壌とは反対の西側の低い方から入りこんだような状況である。

S D18はS X01Bの北東部で発見した東西溝である。S X17土壌の整地層に覆われており、地山面で検出した。東側はS D07C、西側はS D08Bによってそれぞれ破壊されており、東西3.7m検出したのみである。方向は、東でわずかに北に偏している。規模は、幅2.8m、深さ38cmである。壁は緩やかに立ち上がりしており、底面はやや北に傾斜している。埋土の状況はS D19と同様である。遺物は、埋土1層から土師器杯・甕の体部破片が数点出土している。

S D19については、No.2トレンチにおいて対応すると考えられる落ち込みが観察されており、それらの延長線上にはS D08Aがある。S D18についてもS D19の北東延長線上にあり、層位的にも矛盾しない。S D08A・S D18・S D19はN-1ラインで東側に屈曲するという点でS D08Bときわめて類似した在り方を示すところから、一連の遺構である可能性が高い。

② S X06土壌

調査区南半部で発見した土壌である。S X01Bの北半部に盛土整地して造成されており、範囲は南北約8m、東西約11mである。上面はほぼ平坦である。

③ S X03土壌

調査区北半部で発見した南北方向の土壌である。調査区北壁から約16mにわたって検出した。第I層を除去すると直ちに積土が現れ、その西側にS D08B、東側にS D07が並行して延びている。構築にあたっては、にぶい黄褐色土が地山面にほぼ水平に粗く積まれている。方向は、北で東に約4度偏している。規模は、基底幅2.8m、高さ45cmである。

遺物は、積土から須恵器瓶が出土している。

④ S X02土壌とS D07溝跡

S X02は調査区北東部で発見した南北方向に延びる土壌である。S X06土壌の北東部に接続している。

S D07はその西側に沿って延びる南北溝である。S X02・S D07とともに3時期の変遷が確認されている(A→B→C)。

【SX02A・SD07A】SX02A・SD07AはいずれもSX02A・Bによって完全に覆われているためB・C期の積土を数箇所断ち割って部分的に検出したものである。

S X02Aは地山上に直接積土を施されたものである。規模は、基底幅約2m、積土の高さは55cmである。東西に緩やかに屈曲しながら延びている。

S D07Aは調査区北壁で見ると幅1.1m以上、深さ50cmである。

【SX02B・SD07B】SX02Cの積土の西側2分の1を取りはずし、約21mにわたって検出した。

S X02BはSD07Aを埋め、西側に拡幅されている。構築にあたり、東側すなわち土壘のある方向から西側に向かって積まれている。方向は、東西方向に緩やかに屈曲してはいるが両端を結んだ線でみるとおよそ発掘基準線に一致している。規模は、基底幅3.1m、積土の高さは60cmである。

S D07Bは調査区北壁で見ると幅1.1m以上、深さ40cmである。

【SX02C・SD07C】SX02Cは約21m、SD07Cは約17m検出した。

S X02CはSD07Bを埋め、西側に拡張している。積土の構築方法はB期と同様である。方向についてもおよそB期と同様である。規模は、基底幅4.2m、積土の高さは60cmである。遺物は、積土から土師器杯、須恵器杯・長頸瓶・甕、瓦質土器、砥石などが出土している。須恵器甕は頸部に3段の沈線と波状文が巡らされたもので、SX01B出土資料と接合した(第12図1)。

S D07Cは調査区北壁で見ると幅1.0m、深さ30cmである。遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、不明銅製品などが、2層から須恵器杯・瓶が出土している。

⑤ SX20腰郭

調査区北東部で発見した腰郭である。段とその下に平坦面を造り出したものでSX01の東側に位置している。南北約12m、東西約4mにわたって確認した。同位置で1回の改修が認められる。

【SX20A】地表面を削平して造成したもので整地層Bによって覆われている。段の高さは約0.7mで、壁はやや急になっている。

【SX20B】SX20Aを覆う整地層Bによって構築されたものである。段の高さは約0.9mで、壁はSX20Aより緩やかである。

(2) 土壘以前の遺構

土壘以前の遺構としてはSD05・04・16・09溝跡、SX14・15窓状遺構がある。

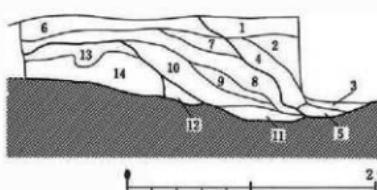
① SD05溝跡

調査区北東部で発見した南北溝である。調査区北壁から約12mにわたって検出した。第IIIc層に覆われており、地表面で検出した。SX02土壘と重複しており、それより古い。方向は、N-15ラインから北側では北で東に約12度偏しているが、南側では南北発掘基準線にほぼ一致している。規模は、幅1.7~2.2m、深さは30~38cmである。断面の形状はV字形である。堆積土は、上層がにぶい黄褐色土、下層が褐色土であり、いずれも東西両側から流れ込んだ状況で堆積している。

なお、N-1ラインの断ち割り調査によってその延長部分と見られる落ち込みを確認しているので、さらに南側に延びていることが考えられる。

遺物は、堆積土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器瓶、無釉陶器甕、2層から須恵器甕が

F—H = 19.80 m



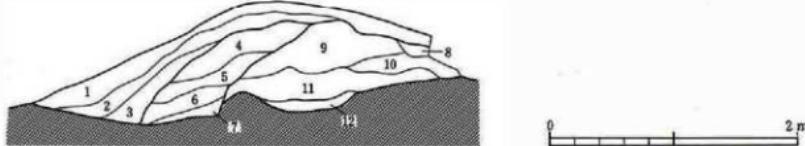
No	土色	土性	層号	場所
1	黄褐色10YR4/8	砂質土	地山部、炭化物を含む。硬くしまっている。	SX02C 墓土
2	白色10Y R4/6	砂質土		
3	黃褐色10Y R3/6	砂質土	地山部。塊状物を含む。硬くしまっている。	
4	褐色10Y R4/6	砂質土		
5	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部。炭化物を含む。	
6	において黄色10Y R4/3	砂質土	地山部含む。硬くしまっている。	SX02B 墓土
7	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部含む。硬くしまっている。	
8	白色10Y R4/6	砂質土	地山部を含む。硬くしまっている。	
9	褐色10Y R5/6	砂質土		
10	褐色10Y R4/8	砂質土		
11	黃褐色10Y R5/6	砂質土	地山部を含む。硬くしまっている。	SX02A 墓土か SX02B 墓土
12	褐色10Y R5/6	砂質土		
13	白色10Y R4/6	砂質土	炭化物わずかに含む。和性・しまりややあり。	SX02A 墓土
14	褐色10Y R4/6	砂質土		

G—H = 18.20 m



No	土色	土性	層号	場所
1	黄褐色10Y R5/6	砂質土	地山部を含む。しまりあり。	S D97C 墓土
2	黄褐色10Y R5/6	砂質土	地山部を含む。しまりあり。	
3	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部、炭化物を含む。和性・しまりなし。	S X02C 墓土
4	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部。しまりややあり。	
5	黄褐色10Y R5/6	砂質土		
6	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部、炭化物を含む。和性・しまりあり。	S X02B 墓土
7	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部。硬くしまっていいる。	
8	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部あり。硬くしまっている。	
9	黄褐色10Y R5/6	砂質土	地山部。炭化物を含む。和性・しまりあり。	

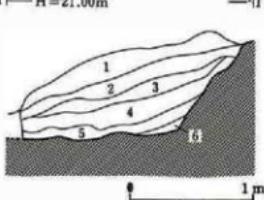
H—I = 18.80 m



No	土色	土性	層号	場所
1	黄褐色10Y R5/6	砂質土	地山部、炭化物をわずかに含む。	S D97C 墓土
2	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部。炭化物を含む。	
3	明褐色7.5Y R5/6	砂質土	地山部、炭化物を含む。硬くしまっている。	S X02C 墓土
4	明褐色7.5Y R5/6	砂質土		
5	明褐色7.5Y R5/6	砂質土	地山部を含む。硬くしまっている。	
6	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部。炭化物を含む。和性あり。硬くしまっている。	S X02B 墓土
7	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部を含む。硬くしまっている。	
8	褐色10Y R3/4	砂質土	地の入人あり。	
9	褐色10Y R5/6	砂質土	炭化物を含む。硬くしまっている。	
10	褐色10Y R5/6	砂質土	地化物を含む。硬くしまっている。	S X02A 墓土
11	褐色10Y R4/6	砂質土	地山部、炭化物を含む。和性・しまりあり。	S D97B 墓土
12	褐色10Y R5/6	砂質土	地山部。炭化物を含む。	

第13図 SX02断面図

I—I = H = 21.00 m



No	土色	土性	層号	場所
1	明褐色7.5Y R4/6	砂質土		
2	褐色10Y R5/2	砂質土	しまりなくぼやがせした土	
3	において黄色10Y R5/3	砂質土	地山部軟弱状に含む	S X02 墓土
4	明褐色10Y R5/4	砂質土	地山部分ブロック、炭化物を含む。しまりあり。	
5	明褐色10Y R4/6	砂質土	地山部、炭化物を含む。	
6	褐色10Y R5/5	砂質土	褐色の砂質土を含む。	

第14図 SX20断面図

出土している。灰釉陶器瓶は体部破片である。体部最大径は約10.5cmと推定される(図版11-6)。無釉陶器甕も体部破片である。外面はヘラナデ、内面はヨコナナデ調整されている。

② SD04溝跡

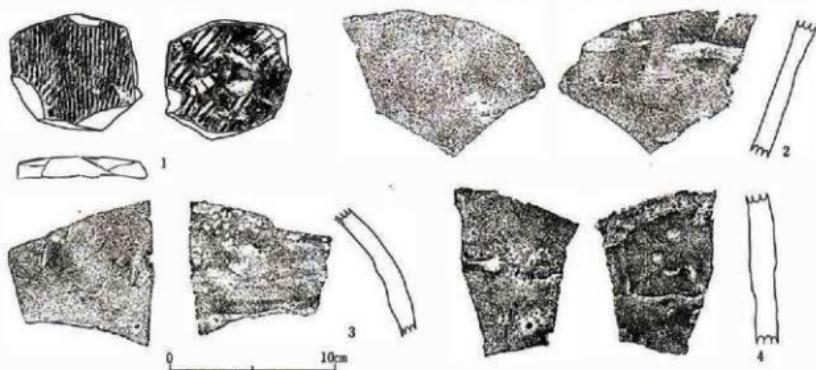
調査区南東隅で発見した南北溝である。整地層Bに覆われ、地山面で検出した。SD16と重複しており、それより新しい。北側はSX14の南側で途切れているが、南側はSX01A土壌の下に入り込み、さらに延びている。検出できたのは12.5mである。北半分は東側へ、南半分は西側へ緩やかに湾曲している。検出した範囲においてその両端を結んだ線で方向をみると北で約15度東へ偏している。規模は、幅0.7~1.0m、深さ32~36cmである。

遺物は、埋土1層から土師器杯、須恵器杯・甕、円盤状土製品が各1点出土している。土師器杯はコップ形の杯の底部破片であり、須恵器杯は底部が回転ヘラケズリされたものである。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである(第15図1)。

③ SD16溝跡

調査区南東隅で発見した南北溝である。整地層Bに覆われ、地山面で検出した。南北ともSD04に切られてしまい、約6m検出したにとどまった。方向は、北で西へ緩やかに湾曲しているが、直線的な部分で見ると北で約19度東へ偏している。規模は、幅0.5~0.6m、深さは14cmである。

なお、トレンチの断面においてSD04より古い深さ42cmの溝跡を確認している。これは、堆積土のあり



番号	種類	遺構	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号	図版番号
1	円盤状土製品	SD04	1層	須恵器甕体部破片を利用				R-12	
2	無釉陶器甕	SD09	2層	【外面】ヘラナデ、にぶい黄褐色10Y R4/3 【内面】ヨコナナデ、褐灰色10Y R5/1 <胎土>褐灰色10Y R5/1				R-29	12-8
3	無釉陶器甕	SD09	2層	【外面】ヘラナデ、褐7.5Y R4/3 【内面】指胴圧痕→ヨコナナデ、灰N 5/ <胎土>にぶい黄褐色10Y R7/4、赤い粒子を含む				R-30	12-4
4	無釉陶器甕	SD05	1層	【外面】ヘラナデ、褐7.5Y R4/3 【内面】ヨコナナデ、にぶい黄2.5Y 6/4 <胎土>外：灰白10Y R8/1 内：褐灰色10Y R6/1				R-32	12-5

第15図 SD04-09-05出土遺物

かたおよび位置関係、またSD04との重複関係から本溝跡の可能性が高く、さらに南側へ延びている可能性がある。

④ SD09溝跡

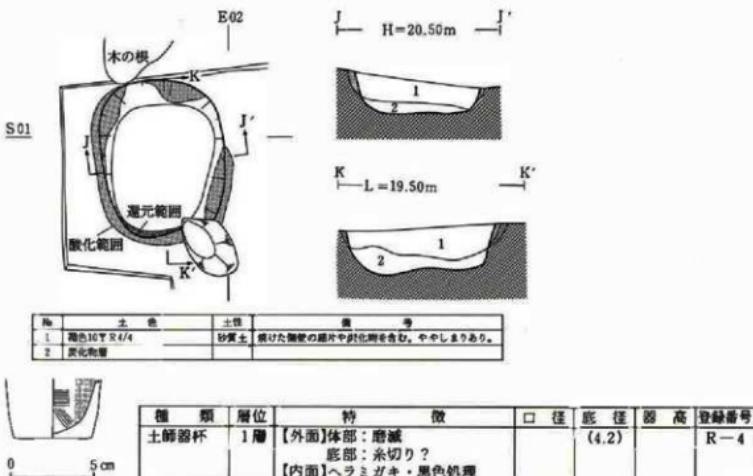
調査区南西部で発見した南北溝である。第IIIa層に覆われており、地山面で検出した。調査区南壁から西壁にかけて約19m検出しているが、それぞれさらに南北に延びている。方向は、南側では北で約14度西に偏しているが、北側では南北発掘基準線とほぼ一致している。底面は北側に向かって傾斜している。上端ラインは凹凸が目立つ。規模は、幅0.9~1.3m、深さは北側はわずか10cmであるが南側の最も深いところでは36cmである。

遺物は、埋土2層から須恵器瓶・甕、無釉陶器甕が出土している。

⑤ SX14焼土土壤

調査区中央部東壁付近の緩やかな北斜面で発見した焼土土壤である。SX06土壤の積土に覆われており、地山面で検出した。平面形は南北にやや長い楕円形であり、規模は長径65cm、短径54cmであり、深さはおおむね15cmである。壁は全体が赤変硬化しており、南側の一部はさらにその内側が還元状態になっている。立ち上がりの角度についてみると、南側の立ち上がりが急であり、他の3面はそれより緩やかである。底面はほぼ平坦であり、炭化物層が厚く堆積している。おおむね4cmであるが北側は厚く12cmである。その上には焼けた壁の細片や炭化物を含む層が堆積している。

遺物は、埋土1層から土師器杯が1点出土している(第16図)。体部がほぼ直立するコップ形の器形である。外面は剥落しているが底部に糸切り痕がわずかに観察され、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

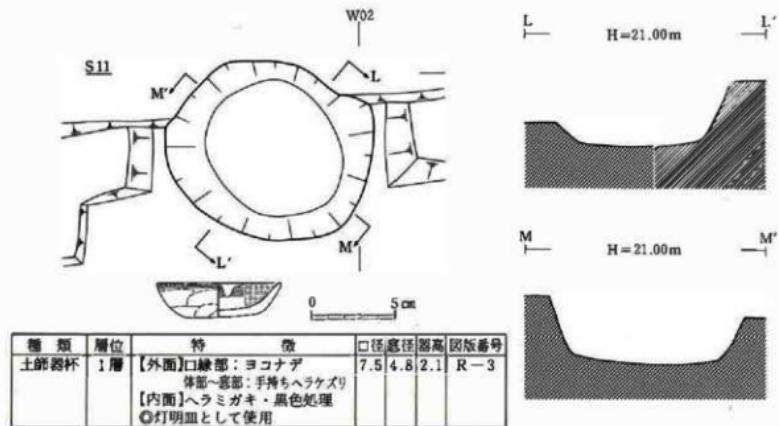


第16図 SX14平面・断面図・出土遺物

⑥ SX15焼土土壤

調査区南半部の緩やかな北斜面で発見した焼土土壤である。SX01A土壠の積土に覆われており、地山面で検出した。平面形は東西にやや長い橢円形であり、規模は長径84cm、短径70cmであり、深さはセクションベルトでみると約30cmである。壁の角度は西側が東側に比べて急である。底面はほぼ平坦である。埋土には炭化物が多量に含まれている。特に東壁付近に焼土や炭化物が多く認められる。

遺物は、埋土1層から土師器小型杯、須恵器瓶が出土している。土師器小型杯は非クロコ調整で底部は平底である。体部は口縁部付近まで手持ちヘラケズリされている。口縁部には油煙状の付着物があり、灯明皿として使用されたと考えられる(第17図)。



第17図 SX15平面・断面図・出土遺物

(3) 土壠との関係が不明な遺構

調査区南西部および南西拡張区で発見した遺構としてはSD10・11・12・13溝がある。

① SD10溝跡

南西拡張区の地山面で発見した南北溝である。長さ8.5m検出した。SD12と重複しており、それより古い。方向は北で約15度西に偏している。壁の立ち上がりは東側と比較して西側がやや急である。上端ラインは直線的である。規模は、幅が1.5~1.8m、深さ0.5mである。

遺物は、堆積土1・2層から土師器甕が出土している。

② SD11溝跡

南西拡張区の地山面で発見した南北溝である。ほぼ平坦な地形の西端部に位置しており、本溝から西側に向かって傾斜している。長さ8.7m検出した。SD12と重複しており、それより古い。方向は、南側がやや東側に偏しているが、大部分は南北発掘基準線とほぼ一致している。規模は、一部くびれている部分で0.5m、広い部分で1.4mであるがおおむね0.9mである。深さは、南端部では42cm、北端部では25cmである。壁の立ち上がりは東側と比較して西側がやや急である。埋土上層は地山小ブロックを多く含んだ約15cmの層であり、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は、堆積土1層から土師器杯・甕・須恵器杯・瓶・甕、赤焼き土器杯・高台鉢、円盤状土製品などが出土している。赤焼き土器杯には内面に油煙付着物の認められるものがある。2層から土師器杯・須恵器杯・赤焼き土器杯が出土している。

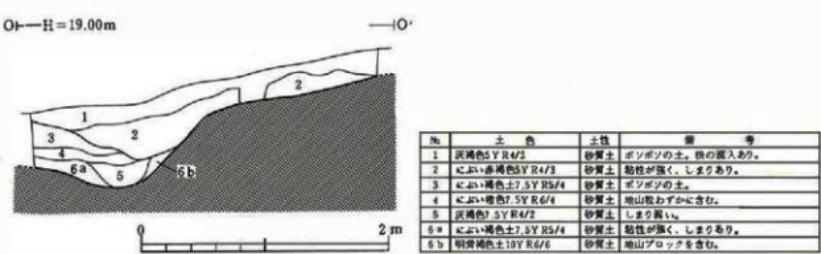
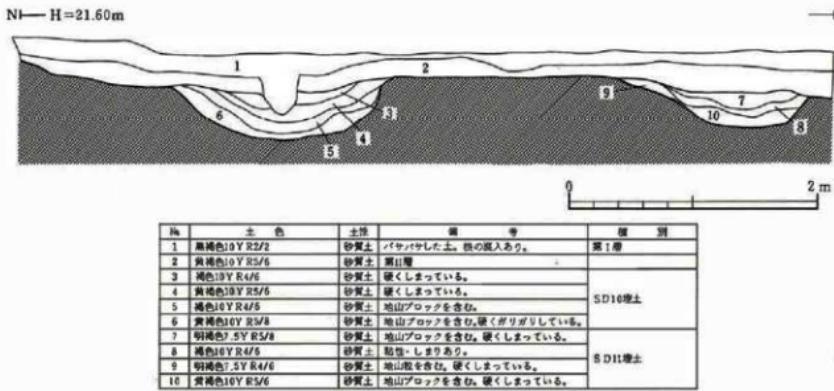
③ S D12溝跡

南西隅から南西拡張区にかけての地山面で発見した東西溝である。東側は屈曲してS D09の0.5m西側で止まっているが、西側はさらに調査区外へ延びている。直線距離にして約8.5m検出した。方向は、直線的な部分でみると東で約15度北に偏している。底面は、東半分はほぼ平坦であるが、西半分は西側へ傾斜している。規模は、幅0.2~0.5m、深さ4.7cmである。

④ S D13溝跡

南西拡張区の西端部で発見した南北溝である。本溝跡は、調査対象地区である丘陵とその西側に位置する丘陵との間の最も低い位置にある。第IIIc層に覆われ、地山面で検出した。長さ4.8m検出したのみであるが、北側はさらに調査区外へ延びている。方向は、北で約14度西へ偏している。規模は、幅1.4~1.6mであり、深さは調査区北端部で55cmである。

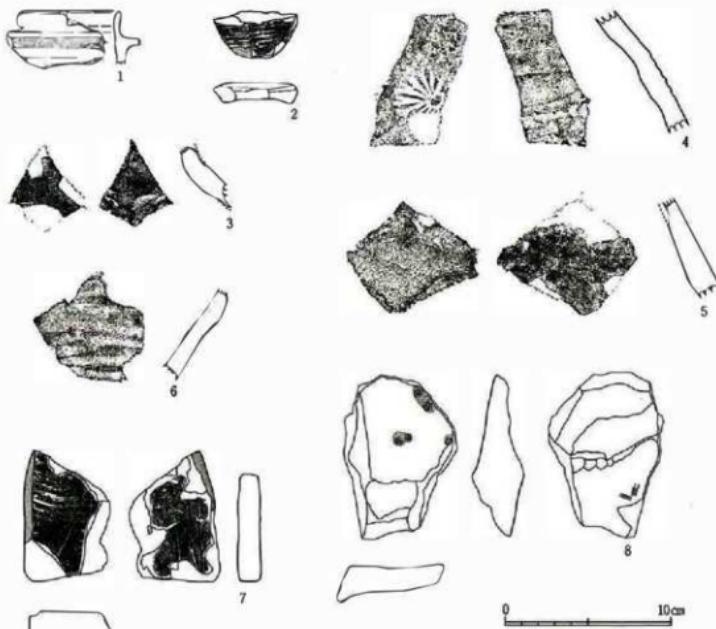
遺物は、堆積土1層から須恵器甕・瓶などが出土している。



第18図 SD10-1断面図

(4) 遺構外出土の遺物

整地層Aからは土師器羽釜・羽釜、須恵器甕、無釉陶器甕、円盤状土製品、不明鉄製品が出土している。土師器羽釜は口縁部と鋸の一部が残存している小破片である(第20図1)。無釉陶器甕には菊花状の押印の施されたものが1点ある(第20図4)。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである(第20図2)。



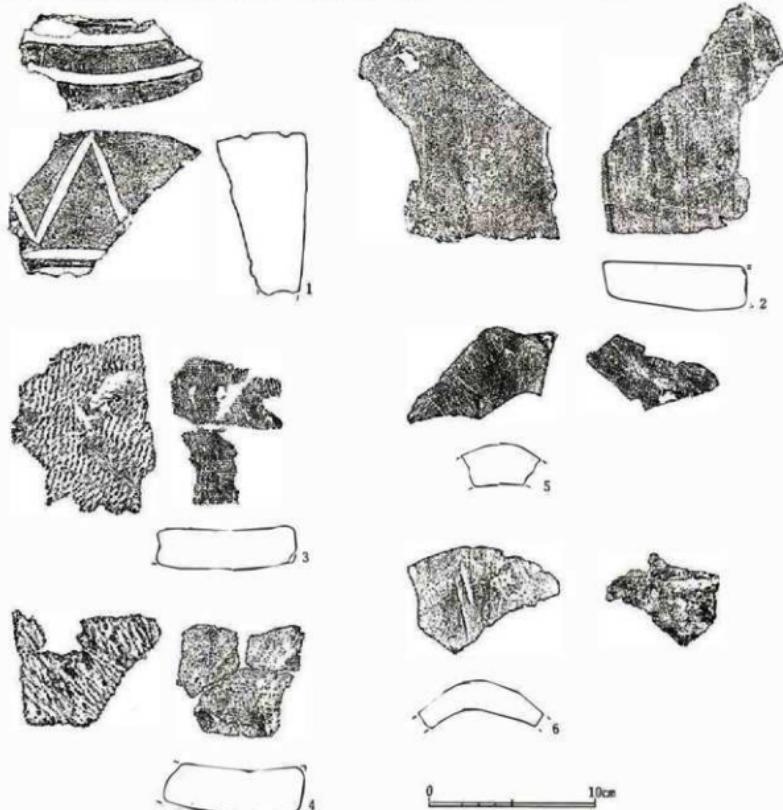
番号	種類	地区	層位	特徴	登録番号	図版番号
1	土師器羽釜		整地層A	【内・外】ロクロナデ	R-42	11-4
2	円盤状土製品		整地層A	須恵器甕の体部破片を利用	R-14	
3	無釉陶器甕		整地層A	【外】自然釉、浅黄5Y7/3 【内】ヨコナデ、灰5Y6/1 <胎土>灰黄2.5Y6/2	R-35	11-7
4	無釉陶器甕		整地層A	【外】自然釉、黄褐2.5Y5/6 【内】ヨコナデ、灰N5/ <胎土>によい黄2.5Y6/3、赤い粒子を含む ◎菊花文の押印	R-34	11-10
5	無釉陶器甕		整地層B	【外】ヘラナデ、によい黄褐10YR5/4 【内】ヨコナデ、褐10YR4/4 <胎土>によい黄褐10YR5/4	R-27	11-9
6	無釉陶器擂鉢		第II層	【外】体部：ヨコナデ→下端をヨコ方向 に手持ちヘラケズリ 【内】使用により磨滅 <胎土>灰白10YR7/1、白色粒を多く含む	R-23	11-2
7	研磨痕のある土器片	北壁トレンチ	第II層	須恵器甕体部破片の割れ口の一部を研磨	R-59	
8	砥石	西垣張区	第II層		R-58	

第20図 整地層A・B、第II層出土遺物

整地層Bからは土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、無釉陶器甕・軒平瓦が出土している。軒平瓦は、瓦当面に重弧文、頸部に鋸齒文が施されたものである（宮城県多賀城跡調査研究所分類番号511）。

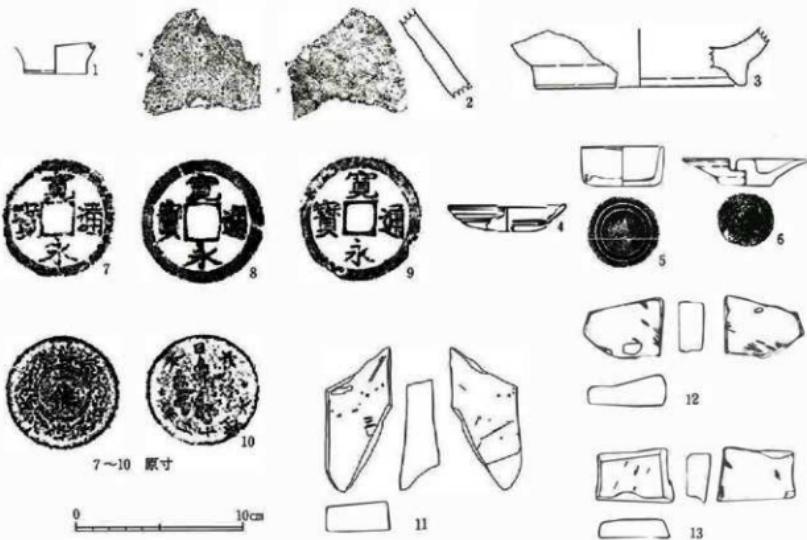
第II層からは土師器甕、須恵器甕、無釉陶器擂鉢が出土している。無釉陶器擂鉢は体部破片であり、外側にヨコナデ調整による凹凸が顕著に残っている。胎土は灰白色を呈しており、東海地方の製品と推定される（第20図6）。

第I層からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・瓶・甕、赤焼き土器杯・高台杯、灰釉陶器瓶、かわらけ、白磁壺、無釉陶器甕・擂鉢、古錢「寛永通宝」、鐵滓、不明鉄製品、不明銅製品および近・現代の陶磁



番号	種類	地 区	技 法	分 類	特 徴	登録番号
1	軒平瓦	Z	桶巻き作り		手書き重弧文511	R-21
2	平瓦	北壁トレンチ	桶巻き作り	I A-a類		R-66
3	平瓦	C区	一枚作り	II C類		R-67
4	平瓦	Z	一枚作り	II B類		R-68
5	丸瓦	南北張張区	粘土板巻き作り	I A類		R-65
6	丸瓦	南北張張区	粘土板巻き作り	I A類		R-64

第21図 第I層出土遺物1)



番号	種類	地区	特徴	口径	底径	器高	登録番号	図版番号
1	かわらけ	Z	【外面】ロクロナデ 【内面】磨滅 ◎高台は厚く、高い	7.6	3.2	1.6	R-48	
2	無釉陶器壺	南西拡張区	【外面】自然釉、暗オリーブ7.5Y4/3 【内面】指頭圧痕→ヨコナデ 灰黄褐10Y R5/2 <胎土>に古い黄褐色10Y R6/3	(12.4)			R-49	11-3
3	無釉陶器壺鉢	B区	【外面】体部：ヨコナデ→下端をヨコ 方向に手持ちヘラケズリ→高 台貼付→ヨコナデ 【内面】使用により磨滅 <胎土>灰5Y6/1.白色粒を多く含む	(3.8)			R-55	11-1
4	陶器皿	Z	【外面】体部：施釉、褐2.5Y4/4 底部：回転ヘラケズリ 【内面】施釉、黄褐2.5Y4/4	(7.1)	(2.7)	1.4	R-11	
5	陶器湯飲み	南西拡張区	【外面】体部：施釉、黄褐2.5Y5/6 底部：回転ヘラケズリ 【内面】施釉、黄褐2.5Y5/6	5.0	4.6	2.3	R-8	
6	陶器蓋	Z	【外面】ロクロナデ 底部：回転系切 に古い黄褐色10Y R6/4 【内面】施釉、黄褐2.5Y5/6	7.6	3.2	1.6	R-7	
7	古銭[寛永通宝]	Z					R-11	
8	古銭[寛永通宝]	A区					R-12	
9	古銭[寛永通宝]	南西拡張区					R-10	
10	古銭[一錢]	Z	大日本大正十二年				R-18	
11	磁石	B区					R-18	
12	磁石	Z					R-45	
13	磁石	南西拡張区					R-19	

第22図 第1層出土遺物(2)

器が出土している。土師器杯には非クロクロ調整で体部に段のある古墳時代後期頃のものが1点出土している。灰釉陶器瓶は体部と底部の破片が各1点出土している。接合しないがSD05溝出土資料と色調・胎土が類似しており、同一個体の可能性がある。そのうち底部破片についてみると、高台の存在を示すわずかな高まりが観察され、さらに外面中央部にのみ砂の付着が認められる(図版11-7)。底径は6cm以上である。かわらけは底部の破片資料が1点出土している。底部は体部より3倍以上も厚く作っており、いわゆる柱状高台といわれているものに近い形態である(第22図1)。無釉陶器擂鉢は高台が付いているタイプである。体部下半は横方向にヘラケズリしており、その後高台を貼付してヨコナデ調整している。胎土は灰白色を呈しており、東海地方の製品と推定される(第22図3)。

その他、分布調査の際に、青磁碗の小破片を1点採集している。口縁部の一部をV字状に小さくえぐり、輪花の菱形を施したものである。13・14世紀頃の製品と考えられる。

6. 遺構の変遷と年代

今回の調査で発見した遺構は、土壘およびその関連遺構(B群)とそれ以前の遺構(A群)、またそれらとの関係が明らかでない遺構(C群)の三者に大きく区分される。以下各遺構の変遷と年代について検討する。

(1) A群

このグループに属する遺構としてはSD04、SD05、SD09、SD16、SX14、SX15がある。これらは、出土遺物から見て古代に属するものと中世以降のもの(SD05・09)とに大きく区分される。

古代の遺構と見られるものは土師器が出土したSX14・15である。土器はいずれも床面から出土したものではないが、SX15から出土した土師器小型杯はおおよそ8世紀後葉頃のものと考えられ、ほぼ完形資料であることから遺構もその年代に近いと判断した。SX14から出土した土師器小型杯は多賀城跡の調査で9世紀初頭から前葉頃としているものに類似している。

中世の遺構と見られるものはSD05とSD09である。これらの埋土からは無釉陶器甕が出土していることからおおよそ中世頃と考えておきたい。

SD04は埋土から古代の土器が数点出土しており、それより古いSD16からは遺物は出土していない。これらはSD05と方向がほぼ同じであり、しかもその延長線上に位置していることが注意されるが、両者の関係は不明である。したがって年代についても不明である。

(2) B群

前節において記述したように、これらの遺構は土壘と溝とが一連の施設として存在したと考えられる。即ち、SX01とSD08(各A・B)、SX02とSD07(各A~C)、SX03とSD07C、SD08BとSX03はそのように見ることができ、ひいてはSX01B、SD08B、SX03、SD07C、SX02Cは同時期に機能していたと推定される。また、SX01Bの北半部に位置するSX06は、SX01Bを覆って造成されたものであるが、その北東部にはSX02Cが取り付いていることからSX02Cおよびそれと一連の他の遺構とも同時期に機能していたと考えられる。SX01Bとの新旧関係は、工程差とは見なし難いことから、SD08はSX01Bの構築からSX06の造成に至るまで存在したと考えておきたい。

従って、SX01B(南半部のみ)、SD08B、SX03、SX02C、SD07C、SX06は同時期に存在した遺構群として考えることができ、これらより新しい遺構は発見できなかったことから、本遺跡における最

終段階の遺構と見ることができる。S X01B、S X02C、S X03などの土壘が直接表土に覆われていることや、SD08B、SD07Cが完全に埋没することなく、調査前まで溝状の窪みとして地表面からも観察できたことはその事実を裏付けるものであろう。

S X01・SD08のA期とS X02・SD07のA・B期との関係については明らかにできなかった。しかし、SD18・19即ちSD08AがSD07Cと重複し、その東側には延びていないことや、S X01・SD08のB期はA期よりやや西側に拡幅した状況ではあるがほぼ同位置で屈曲して延びている状況を考慮するならば、S X01・SD08のA期とS X02・SD07のA・BについてもC期と同様に一連の施設として機能していた可能性が考えられる。

以上のことから、B群の遺構は大きく2段階に区分することができる(I期→II期)。两者とも細分できる要素は認められるもののいずれも判定材料に乏しく、ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。

I期 S X01A・SD08AとS X02・SD07B或いはS X02・SD07Aが一連の区画施設として存在したと推定される時期。

II期 S X01B・SD08BとS X02C・SD07Cが存在し、新たにS X03が加わる時期。さらに、最終的にはS X01Bの北半部に大規模な盛土整地を施してS X06を造成している。

次に、これらの年代について検討する。手がかりとなる資料は少ないが次のものがある。

- ① S X02Aは無釉陶器甕が出土したSD05より新しい。
- ② S X01B積土から無釉陶器甕が出土している。
- ③ SD08Bの確認面である整地層Aから無釉陶器甕が出土している。
- ④ SD08Bの1層から仙台通宝、2層から寛永通宝が出土している。

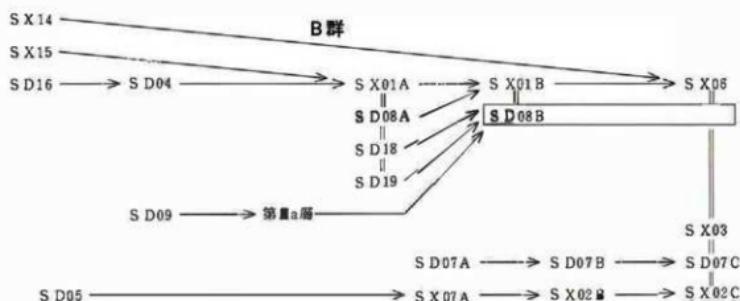
①～③の無釉陶器甕の詳細な年代は不明であるが、これらの遺構の上限年代が中世であることを示している。④については、前者の初鋸年代が1784年、後者が1626年である。このうち、前者については埋土の最上層から出土していることから本遺構の下限年代を示すものと見られ、18世紀後半頃には完全に埋没したことが知られる。後者の資料はSD08B機能時のものかそれ以前のものか判断は難しいが、近世以前に土壘や溝で区画した施設は基本的に構築されないという考えに従えば埋没していく過程で混入したと見るのが自然であろう。従って、これらの遺構の年代については大きく中世頃と捉えておきたい。

(3) C群

土壘およびその関連遺構との関係が不明な遺構としてSD10・11・12・13がある。出土遺物は、SD10・11・13から古代の土器が出土している。特にSD11から比較的多く出土しており、古代の遺構である可能性が高い。年代は、1・2層より赤焼き土器が出土していることから10世紀前葉頃と考えられる。SD10・13については古代の土器が数点出土しているのみであるが、SD08BやSD09など中世の遺構の埋土とは全く異なることから古代の遺構である可能性が高いと考えておきたい。

以上の遺構の関係を整理すると次のとおりである。

A群



C群



7. 焼土土壤について

焼土土壤としたSX14・15について少し詳しく触れておきたい。はじめに、これらの特徴を挙げると次の5点である。

- ① 形態的には平面形がほぼ円形
 - ② 底面はほぼ平坦
 - ③ 壁の立ち上がりは一方が急であり、その反対側は比較的緩やか
 - ④ 壁および底部の一部が熱を受けて硬化している。特に壁の急な側に顕著
 - ⑤ 底面に厚い炭化物層が形成されている。
- ④と⑤の特徴から本遺構が火に関わることは確実である。しかも、還元状態のため内側が灰黒色を呈し、その外側は赤褐色と色調も変化していることからかなりの高さまで温度を上げていたことが推定される。
- ③と④の特徴は燃料を投入する方向が一定していることを想定させる。遺構に伴う遺物は出土していないが、このような特徴をもつ遺構は土器の焼成施設とされているものに類似しているようと思われる。⁽⁵⁾
- 同様の特徴を持つ遺構は本遺跡周辺では高崎遺跡第16次調査で1基、同遺跡第20次調査で1基発見されている。⁽⁶⁾ いずれも年代は不明である。

8. 出土遺物について

第1次調査で出土した遺物には、土器、陶器、磁器、瓦、土製品、石器、石製品、金属製品、鉄滓など

(5) 窯跡研究会編『古代の土器器生産と焼成遺構』 1997

(6) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡第一第13~16次調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第12集 1996

(7) 平成8年度調査。未報告。

がある。表土および堆積層から出土したものが多く、確実に遺構に伴う資料は少ないが、各時代の遺物が出土していることから本遺跡を理解する上で手がかりになると考えられる。以下、時代ごとに整理し、簡単に説明する。

(1) 繩文時代の遺物

無茎の石鍬（第12図5）が1点出土している。材質は黒曜石である。^{高崎丘陵において}繩文時代の遺構は未だ発見されていないが、土器や石器は各遺跡から少數出土している。

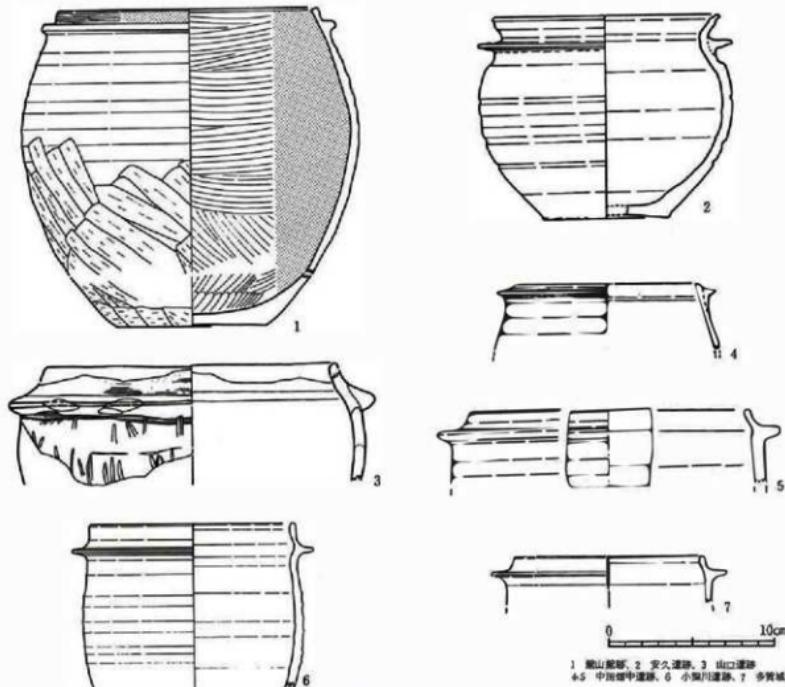
(2) 古代の遺物

土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦が出土している。

① 土師器

杯、甕、羽釜がある。杯はすべて内面がヘラミガキ・黒色処理されるもので、形態がわかるものには体部がほぼ直立するものと小型のものがある。

第16図は、体部がほぼ直立し、器高が高い杯である。このタイプの杯は多賀城跡でも数点出土しており、そのうち第62次調査S I 2151出土資料に類似している。同資料は9世紀初頭～前葉頃に位置づけられてお



第23図 宮城県内出土の羽釜

(6) 石材については宮城県多賀城跡調査研究所の柳沢和明氏に御教示頂いた。

⁹り、本資料もおおよそその頃のものと考えられる。第17図は、小型の杯である。非ロクロ調整であり、外側は口縁部がヨコナデ、体・底部にヘラケズリが施される。底部は平底である。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

羽釜（第20図1）は口縁部と鉢部の小破片である。内・外側ともロクロナデされ、口縁部はほぼ直立し、端部はやや外反する。外側の口縁部から1.5cm下に鉢があり水平に巡っている。羽釜は、県内では、仙台市安久遺跡¹⁰、中田畠中遺跡¹¹、山口遺跡¹²、津山町柳津館山館跡¹³、七ヶ宿町小梁川遺跡¹⁴、多賀城市多賀城跡¹⁵、西沢遺跡¹⁶から出土しているが、まだ10例に満たない（第23図）。津山町柳津館山館跡出土例はロクロ調整の後、内側がヘラミガキ・黒色処理されたものであるが、他の資料はすべてロクロナデによって仕上げられている。本例は、形態的には小梁川遺跡や多賀城跡出土資料に類似している。小梁川遺跡では共伴した土師器からその年代を9世紀後葉としており、本資料の年代もおおよそその頃と考えられる。

② 須恵器

杯、蓋、高台付杯、甕、長頸瓶がある。

甕（第12図1）は、頸部外面が3段の沈線で区画され、その間に櫛描き波状文が施されたものである。このような特徴を持つものは、県内では、仙台市土手内窯跡の3号窯¹⁷、利府町磯沢窯跡のB2号窯¹⁸などで出土している。年代については、前者が田辺昭一による陶邑窯編年のTK217型式期並行（7世紀第2四半期～中葉）とされ、後者が8世紀中葉とされることから本資料も概ね7～8世紀に属するものと考えられる。

③ 赤焼き土器

杯、高台付杯、高台鉢がある。いずれも小破片で特徴的な部分は残っていない。

④ 灰釉陶器

瓶の体部破片2点、底部破片1点が出土している。接合しないが色調・胎土が類似し、同一個体と考えられる。

⑤ 瓦

軒丸瓦1点、軒平瓦2点、丸瓦15点、平瓦29点が出土している。軒平瓦（第21図1）は、桶巻き作りによるものであり、瓦当面に重弧文、頸部に锯齒文が施されたものである。宮城県多賀城跡調査研究所の分類番号511である。丸瓦・平瓦についても、同研究所の分類に従えば丸瓦15点のうちIA類が2点、IIB類2点、平瓦29点のうちIA類が16点、IIB類が8点、IIC類が3点となる。

（3）中世の遺物

かわらけ、無釉陶器、磁器がある。

⑨ 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報1992」1993

⑩ 仙台市中田第一土地区面積整理組合「安久遺跡発掘調査略報」1975

⑪ 仙台市教育委員会「中田畠中遺跡」仙台市文化財調査報告書第53集 1983

⑫ 仙台市教育委員会「山口遺跡II」仙台市文化財調査報告書第61集 1984

⑬ 宮城県教育委員会「柳津館山館跡」宮城県文化財調査報告書第102集 1984

⑭ 宮城県教育委員会「七ヶ宿ダム開削遺跡発掘調査報告書1」宮城県文化財調査報告書第107集 1985

⑮ 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報1991」1992

⑯ 多賀城跡の東辺に近接した調査区において、鍛冶炉や堅穴式の工房などを多数発見している。平成7年度調査。未報告。

⑰ 註7と同じ

⑱ 仙台市教育委員会「土手内」仙台市文化財調査報告書第165集 1992

⑲ 宮城県教育委員会「磯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集 1987

① かわらけ

底部破片が1点出土している(第22図1)。ロクロ調整で底部が厚く、いわゆる柱状高台といわれるものに類似する。

② 無釉陶器

甕、擂鉢がある。

甕は、体部破片が8点出土している。色調・胎土からすべて別個体である可能性が高い。いずれも粘土紐巻き上げ成形で、調整は内面がヨコナデ、外面がヘラナデである。酸化炎焼成されており、中世陶器の分類では甕器系と呼ばれるものに属する。特徴的な部分がないため、これらの年代は不明である。生産地についても同様に不明であるが、焼成や胎土の様子は地元窯の製品より東海地方の製品に類似しているような印象を受ける。第20図4は菊花状の押印が施されたものである。同様な押印のある陶器は常滑窯(愛知県)から出土しており、同窯製品の可能性がある。

擂鉢は、体部破片1点、底部破片1点が出土している。いずれも外面体部下半が横方向にヘラケズリされおり、そのうち底部破片(第22図3)には高台が貼り付けられている。高台のある擂鉢は東北地方でも石巻市水沼窯跡や福島県梁川町八郎窯跡などで出土しているが、本資料は色調・胎土は灰色を呈しており、それより東海地方の製品に類似している。赤羽一郎・中野晴久の常滑窯編によれば、その5型式期(13世紀第2四半期)には高台を有するものが主流であり、その後半には平底のものが出現して、6a型式期(13世紀第3四半期)には高台が消滅するとされている。¹⁰これに従えば本資料の年代は、5型式期以前すなわち13世紀第2四半期以前と考えられる。

● 磁器

白磁壺と青磁碗が出土している。いずれも小破片である。白磁壺は体部破片であり、四耳壺などの器種が推定される。青磁碗は口縁部に輪花が施されたもので、おおよそ13・14世紀の龍泉窯系のものとみられる。

(4) その他の遺物

近世以降の陶磁器・古錢、土製品、石製品、鉄滓がある。

① 近世以降の陶磁器

杯、皿、蓋、湯飲み、碗、鉢などが第I層から出土している。いずれも小破片で年代や生産地については不明であるが、堤焼(仙台市)など地元の製品や相馬大堀焼(福島県)に類似しているものなどがある。第20図5は近代の汽車土瓶に伴う陶器の湯飲みである。年代は大正～昭和時代である。

② 古錢

寛永通宝が4点、仙台通宝が2点、桐一錢が1点出土している。寛永通宝はいわゆる「ス宝錢」で、1626年切銘の古寛永一文銭である(第12図8、第22図7～9)。

③ 土製品

円盤状土製品と研磨痕のある土器片がある。

脚注 福住高根古窯出土遺物の中に類例が認められる 常滑市役所『常滑窯業誌』1974

1) 中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』1995

2) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982

3) 宮城歴史博物館『汽車土瓶』1995

円盤状土製品としたものは、須恵器甕の体部破片を利用し、その周縁部を打ち欠いておおよそ円形に加工したものである（第12図3・7、第20図2）。同様な製品は多賀城市内の市川橋遺跡や山王遺跡から多数出土している。用途は不明であるが、確実に古代の層から出土しているものもある。研磨痕のある土器片も須恵器甕の体部片を利用したものであり、断面の一部に研磨痕が認められる（第20図7）。

④ 石製品

砥石がある。擦痕の方向はいずれも斜めを基調としている（第22図11～13）。敲打痕が認められるものもある（第20図8）。

⑤ 鉄 淬

試掘調査時に2点出土している。科学的な分析を行っていないため詳細は不明である。

8. まとめ

- ① 中世の土塁と溝を発見した。
- ② 土塁と溝は一連の区画施設として存在し、2～3時期の変遷が認められる。
- ③ 下層遺構として古代の焼土土壤を2基発見した。これらは土器焼成遺構の可能性がある。

III 第3次調査

1. 調査要項

所在地 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目地内
調査面積 200m² (対象面積930m²)
調査期間 平成9年4月11日～6月26日
調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 横井 茂男
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 木村 忠雄
調査員 石川俊英 高橋圭藏 三浦幸子 車田 敦
調査協力者 首野昭市 鈴木嘉兵衛 赤間利夫 首野廣志
調査参加者 赤間栄二郎 津野 真 阿部トシ子 阿部 弘 安藤美喜子 伊藤正直
大河原政夫 太田恆一郎 大竹重次郎 小川ちよ子 小川光夫 小野玉乃
首野恵子 熊谷きみ江 熊谷サツキ 後藤恵子 佐々木軍治 柴田幸四郎
首原綱代 鈴木太仲 大道寺勉 武山あや子 角田静子 手嶋與美 南城美絵子
橋本 務 平山節子 福永孝二 藤田恵子 星 光治 水越朝治 森 栄一
矢萩栄四郎 山田弘子 渡邊義一 渡邊正一 渡辺ひで子 渡辺ゆき子

2. 調査に至る経緯

本調査は、市道中道株木線道路改良工事に係る事前調査である。

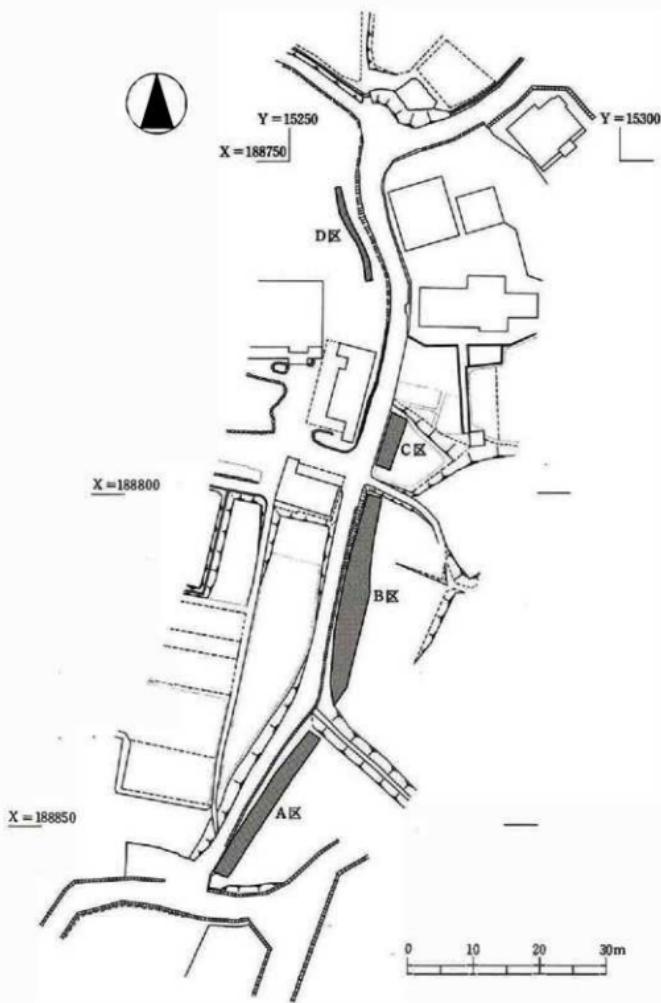
本件については、平成8年11月に多賀城市建設部道路課から文化財課に対して計画の内容が示され、埋蔵文化財との関わりについて照会があった。それによると、本遺跡のほぼ中央部を南北に延びている幅4mの既存の道路を、その東側斜面を掘削して幅6mに拡幅するというものであった。

当該地は第1次調査区と第2次調査区のほぼ中間に位置しており、第1次調査では古代から中世、第2次調査では中世・近世の遺構・遺物が発見されている。このことから、今回の対象地区においても同様な遺構・遺物の存在が予想された。特に第1次調査で発見した土壙や溝は今回の対象地区に向かって延びている可能性が考えられた。これらをふまえ、対象地区全体を発掘調査する必要があること、および拡幅部分は掘削を伴うことから事前調査で対応すべきであると判断した。その後、埋蔵文化財調査センターと道路課が調査日程等について協議を行い、平成9年4月11日から調査を開始した。

3. 調査方法と経過

(1) 調査方法

調査対象地区は東西4m、南北200mである。そのうち、北端部の約25mは現道の西側に、それより南側の調査区はすべて現道の東側に位置している。また、南端部から約30mの地点には東側から延びる通路があり、その部分は地域住民の便宜を考慮して調査の対象から除外した。この結果、調査区は大きく北端地区、中央地区、南端地区に区分されることになり、南端地区をA区、中央地区南半部をB区、同北半部をC区、北端地区をD区として調査を進めた。



第24図 調査区位置図

実測図の作成に際し、A～C区の平面図は縮尺1/20で造り方実測を行い、断面図も縮尺1/20で作成した。遺構を検出できなかったD区については縮尺1/100で平板実測を行った。

(2) 調査経過

今回の調査は4月11日から6月26日まで、実働45日間実施した。調査経過は以下の通りである。

4.11	B、C区北側から重機による表土除去	6. 5	B区東壁セクション図作成。B・C区間の表土除去作業、及び遺構検出作業
4.13	A、B区南側から人力による表土除去（～18日）	6.13	C区で土壤検出状況の写真撮影。その後、精査
4.22	A、B区遺構検出作業開始	6.16	A区全景写真撮影
4.24	測量基準点設置。調査区内を3m方眼に割り付ける（～30日）	6.19	A区東壁セクション図作成
5. 2	C区遺構検出作業開始	6.25	B区全景写真撮影
5. 6	D区人力による表土除去、及び遺構検出作業開始（～7日）	6.26	C区東壁セクション図作成、及び写真撮影。全ての調査終了
5. 8	D区全景写真撮影		
5.26	B区ベルトセクション図作成、及び写真撮影。D区平面図作成		

4. 発見した遺構と遺物

今回の調査では、溝跡6条、土壤1基、および柱穴などを発見した。各区ごとに層序が異なり、相互の関係も明らかでないため、以下地区ごとに説明する。なお、その他の遺構については、東壁断面でのみ確認したものであるため、詳細は不明である。

(1) A 区

① 層序

第I層：黒褐色(10Y R3/2)砂質土。現代の表土である。

第II層：褐色(10Y R4/4)砂質土。調査区全域に認められ、北側では地山を直接覆い、南側では第III層の上に堆積している。

第III層：褐色(10Y R4/4)粘質土。調査区南側に分布し、地山上に直接堆積している。上面はSD94の確認面となっている。厚さは10～20cmである。a・b層に細分することができる。

② SD94溝跡

調査区南側で検出した東西溝跡である。第II層によって覆われており、第III層上面から掘り込まれていることを確認した。調査区外に延びているため、確認できた長さは約5mである。方向は北で約25度東に偏している。規模は、上幅2.9m以上、深さ80cmである。埋土は7層に区分することができる。1・2層はほぼ水平に堆積しており、3・4・5層は南側から強く傾斜したような状態で堆積している。遺物は土師器杯・甕・須恵器瓶・赤焼き土器杯などが出土している。土師器杯はロクロ調整されており、底部には回転糸切り痕が認められる。土師器甕もロクロ調整されたものが出土している。

③ SD95溝跡

調査区中央部の地山上で発見した南北溝跡である。規模は、長さ3.8m、上幅60cm、下幅40cm、深さ20cmである。方向は、北で約10度東に偏している。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していない。

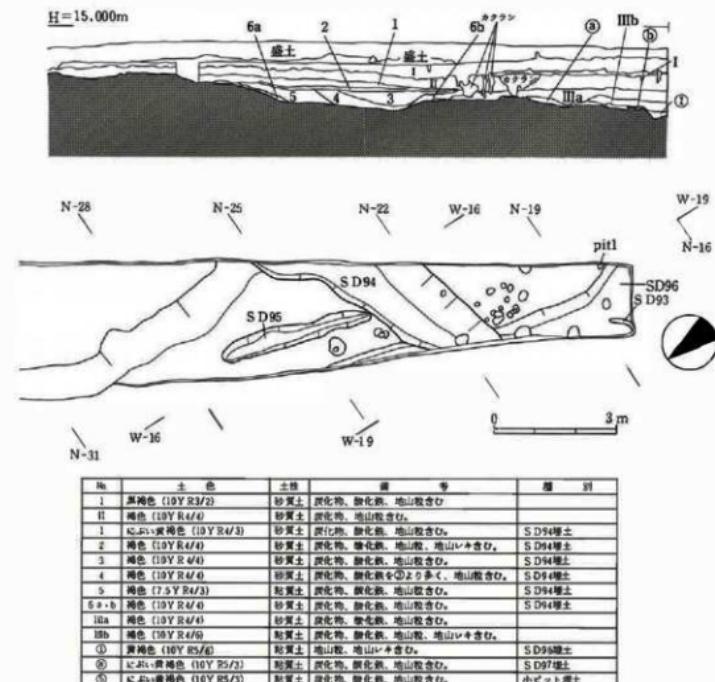
④ SD96溝跡

調査区南端部で検出した南北溝跡である。第III層によって覆われており、地山面から掘り込まれていることを確認した。SD93と重複し、それより新しい。南北約8mにわたって検出し、さらに調査区外にの

いる。南端部でやや東側に屈曲してはいるが、方向は北で約15度東に偏している。規模は、上幅1.5m以上、深さ20cmである。埋土はにぶい黄褐色土であり、炭化物や焼土を含んでいる。遺物は出土していない。

⑤ SD93溝跡

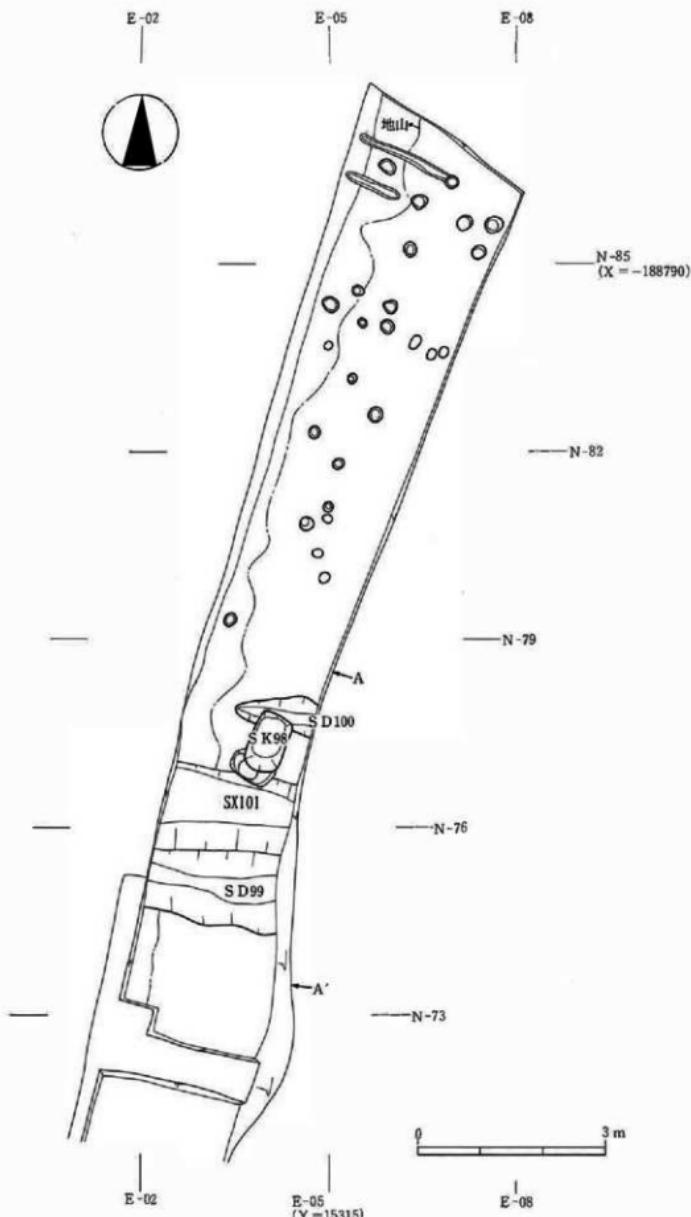
調査区南端部において、SD96の埋土を掘り上げた後に地山上で発見した南北溝跡である。調査区外に延びているため、確認できた長さは約0.6mである。方向は南で約30度西に偏している。規模は、上幅20cm、下幅10cm、深さ10cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。



第25図 A区遺構配置図・東壁断面図



第26図 A区出土遺物



第27図 C区遺構配置図

(2) B・C区

B区では遺構を発見できなかった。C区において土壌1基、溝2条と柱穴を発見した。

① 層序

B・C区の地形は南から北東に向かって緩やかに傾斜しており、C区北端から急に落ち込み始めている。

第I層：褐色土(10Y R 4/6)。現代の表土。

第II層：暗褐色土(10Y R 4/4)。調査区全域に堆積する。この層まで近世の遺物を含む。

第III層：褐色土(10Y R 4/4)。灰白色火山灰ブロックを含む。調査区北側に堆積する。

第IV層：灰黄褐色土(10Y R 4/2)。この上面で検出した土壌の埋土に灰白色火山灰が堆積。C区のみで確認

第Va層：褐色土(10Y R 4/4)。B区南半部のみに分布。

第Vb層：暗褐色土(10Y R 3/4)。調査区ほぼ全域に分布する層である。

第VI層：暗褐色土(10Y R 3/4)。やや粘性あり。調査区南側に堆積する層である。

第VII層：褐色土(10Y R 4/6)。地山粒を多量に含む。調査区ほぼ全域に分布する。

第VIII層：褐色土(10Y R 4/4)。調査区中

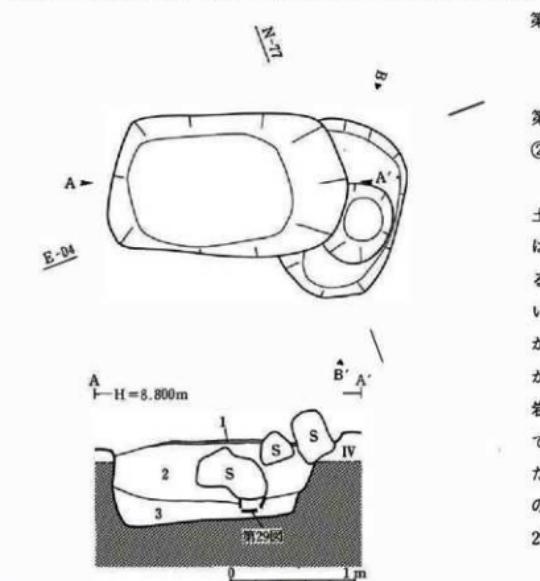
央部から南側にかけて確認

された層である。

第IX層：地山（岩盤）

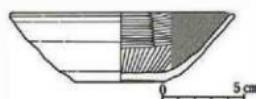
② SK98土壤

調査区南側の第IV層上面で発見した土壌である。平面形は長方形で、規模は長辺90cm、短辺60cm、深さ30cmである。埋土は3層に区分され、1層は薄い灰白色火山灰層、2・3層は褐色土が主体である。2層には大小8個の石が含まれており、その内の一つは凝灰岩で火を受けて内部まで赤色に変化している。他のものはわずかに火を受けた様子が窺える。遺物は、2層と3層の間から土師器杯が1個体出土した(第29図)。



第28図 SK98平面図・断面図

No.	土色	土性	特徴
1	灰白色 (10Y R 6/1)	灰白色火山灰	
2	褐色 (10Y R 4/4)	シルト	炭化物、地山岩、火山灰ブロックを含む。
3	褐色 (10Y R 4/4)	シルト	地山を含む。



第29図 SK98出土遺物

種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
土師器杯	1-2	【外面】体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整 【内面】ミガキ後黒色処理	13.4	5.4	4.2	R-1

③ S D99溝跡

調査区南側第III層上面で発見した東西溝跡である。調査区外に延びており、確認できた長さは2.2mである。方向は、西で約7度北に偏している。上幅1.2m以上、下幅40cm、深さ30cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していない。

④ S D100溝跡

調査区南側第III層上面で発見した東西溝跡である。調査区外に延びているため、確認できた長さは1.3mである。方向は、西で約10度北に偏している。規模は、上幅60cm、下幅20cmである。埋土は地山ブロックを含む黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

⑤ S X101柱穴

調査区南側で発見した柱穴である。第IV層上面で検出した。S K98と重複し、これより古い。規模は、一辺40~50cm、深さ16cm、柱痕跡は径30cmの円形である。掘り方埋土は褐色土で地山粒を含み、柱痕跡は黒褐色土である。遺物は出土していない。

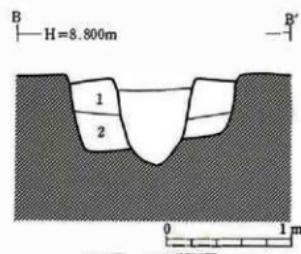
⑥ 堆積層出土の遺物

B区第I層からは、近・現代の陶磁器が多く出土している。染付磁器の飯茶碗・皿・猪口が多く、底部に「太明成化年製」と銘款のある肥前産有田様式の角形大皿もある(図版13-4)。古代のものとしては赤焼き土器小型杯が出土している。内外面暗褐色で胎土に砂粒、ガラスが含まれている。第II層からはかわらけが出土している(第32図2)。ロクロ調整で内外面、胎土とも黒色である。また口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

C区第I層からは近世・近代の陶磁器やかわらけ、古代の土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦などが出土している。第II・III層からは近世のかわらけ、古代の土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、赤焼き土器杯や砥石、第IV~VI層では土師器杯・甕、須恵器杯・瓶が出土している。しかし、いずれの層の遺物も破片である。

(3) D区

近年の盛土下に厚さ10~50cmの表土があり、その下層は地山(岩盤)となっている。表土から土師器や油煙が付着した灯明皿等の小片が数点出土したのみで遺構は発見できなかった。



第30図 SX101断面図

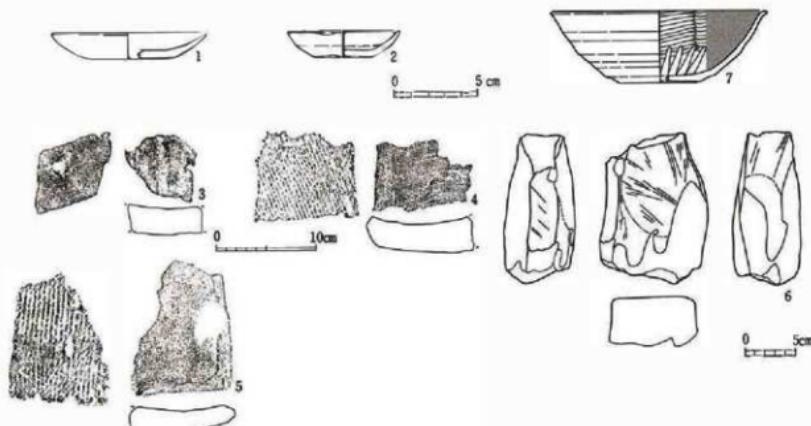


第31図 C区東壁断面図

5. 遺構の年代と分布

第3次調査では、南北に長い調査区のため、遺構の広がりを平面的に把握することはできなかった。ここではA・C区から発見した遺構について簡単に説明する。

1. A区では調査区の南端部の第III層上面で溝1条、地山上で溝3条などを検出した。このうち第III層上で検出したS D94溝跡は、埋土の2層から赤焼き土器杯が出土している。埋土2層は、その堆積状況から溝本体が埋没した後のくぼみに堆積した層と見られる。従って赤焼き土器杯はS D94の下限年代を示す資料と考えることができ、その年代観によればおおよそ10世紀前葉頃とすることができる。他の遺構については出土遺物がないため年代は不明である。
2. C区では第III層上面で溝2条、第IV層上面で土壤1基を検出した。S K98は、埋土が10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰の自然堆積層で覆われており、10世紀前葉を下限とすることができる。また、埋土2層と3層の間から回転糸切り無調整の土器杯が出土している。土器杯はほぼ完形



番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	かわらけ	L-I	【外面】体部：ロクロナデ（磨滅） 底部：回転糸切り無調整 【内部】ロクロナデ	(9.2)	(4.8)	(1.6)	R-5
2	かわらけ	L-II	【外面】体部：ロクロナデ、付着物 底部：回転糸切り無調整 【内部】ロクロナデ、付着物	(6.8)	(3.5)	(1.6)	R-4
3	平瓦	L-1	一枚作り、II C類。胎土砂粒含む。灰色				R-18
4	平瓦	L-1	一枚作り、II C類。胎土砂粒含む。黒褐色				R-19
5	平瓦	L-1	桶巻作り、IA-a類。胎土砂粒含む。灰色				R-20
6	磁石	L-II	長さ14cm、幅10.1cm、厚さ5.5cm、材質：砂岩 表面は3面				R-9
7	土器杯	L-II	【外面】体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整 【内部】ミガキ後黒色処理	(12.8)	(4.9)	(4.3)	R-2

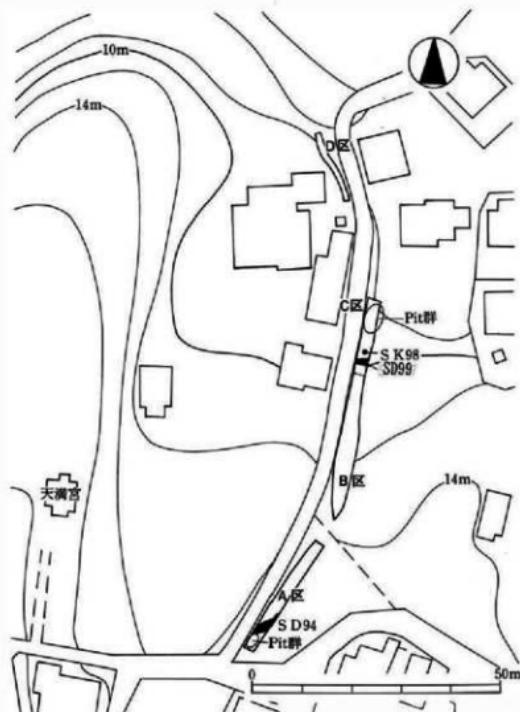
第32図 B区堆積層出土遺物

であり本遺構の年代に近いものと考えることができる。これらのことから、SK98はおよそ10世紀前葉頃の遺構と推定される。SD99-100溝跡については遺物は出土していないが、層位的にみて10世紀前葉以降の年代が与えられる。

3. 今回の調査では、分布状況は希薄であるが古代の遺構を発見した。調査区周辺の畠にも古代の遺物が散布していることから、本調査区周辺には古代の遺構が少なからず存在している可能性が高くなつた。

6. まとめ

- (1) 丘陵北斜面において、古代およびそれ以降の溝6条、土壙1基、柱穴などを発見した。
(2) SD94・SK98の年代は、およそ10世紀前葉頃である。



第33図 遺構分布図

IV 考 察

本遺跡は、館跡としての内容をもつ範囲を高崎遺跡の中から分離したものである(「II 2. 調査に至る経緯」)。しかし、それらの全体的な構造についてはこれまでほとんど触れるところがなかった。本遺跡においては、旧地形を残すと見られる部分が多く残っており、土壘状の高まりや人工的な傾斜面などを各地点で確認することができる。以下、それらを抽出し、雷ヶ谷遺跡における館跡の様子について簡単にふれてみたい。

No.1 地区（第1次調査区）

南北方向にのびる土壘・溝が発見されている。それらは北側に傾斜する尾根上に土壘・溝が構築されたもので、SX01は2時期、SX02は3時期の重複が確認されている。いずれもおおよそ同位置で重複していることから一貫してその位置が区画の対象とされていたことが知られる。この調査区の西側は緩やかな谷をはさんで天満宮のある平場へと続いている。東側の宅地との境界は急斜面となっているが、周辺の地形から推定すると、本来緩斜面が続いていた可能性がある。また、南側は約30mで丘陵頂部に至り、その南側は大部分が急斜面となっている。

No.2 地区（第2次調査区）

西側の上段平場（平場1）とその東側の下段平場（平場2）の二つの平場を確認した。上段平場は、北側へ細長く舌状に張り出した地形を利用したもので、その南西隅には土壘の一部が確認されている。また、この平場の東側は急斜面となっており、その裾部に溝が巡っていることから人工的に削り出している可能性が高い。下段平場は北側が緩やかな傾斜面であり、かつて裾部に東西方向にのびる土壘状の高まりが存在した(A)。東側には通路と見られる空堀状の落ち込みと土壘状の高まりが認められる(B)。両平場とも南側はNo.3地区の北辺の土壘で区画されており、その内側には溝が巡らされている。

No.3 地区（第1・2次調査区の間の地区）

第3次調査におけるA・B区の東側にある。北辺・南辺・西辺に土壘を巡らした方形の平場がある（平場3）。平場の面積は、土壘の内側で計測すると東西35~45m、南北45~55mである。北辺の土壘にはNo.2地区上段平場南西隅の土壘が連続しており、その西側には切り通しの通路がある(C)。また、その西側には鉤形に屈曲した土壘があり折形とみられる(D)。その外側は比較的急斜面となっており、裾部と土壘頂部との比高差は約3mである。西辺の土壘は現状ではわずかの高まりとなって観察されるのみである。その高まりは幅約10mであり、第1次調査区のSX02・03等のはば延長線上に位置している。No.1地区の北端部が現在の道路によって分断されていることを考慮するならば、これらは本来連続していた可能性がある。南辺の土壘は、幅5~9mであり、西辺の土壘から東へ約20mにわたって確認できる。この土壘の上には幅2~3mの高まりが東西約60mにわたって続いているが、No.1地区で発見した土壘と本地区西辺の土壘との関係を考慮するならば後世のものである可能性が高い。東辺は約1.5mの段差があつて狭い通路がある(E)。その東側は急斜面となっており、No.4地区に続いている。通路との比高差は約8mである。

No.4 地区

No.3地区の東側の一段低い部分についても、西側と南側とは急斜面となっており、平面的にはおおよそ

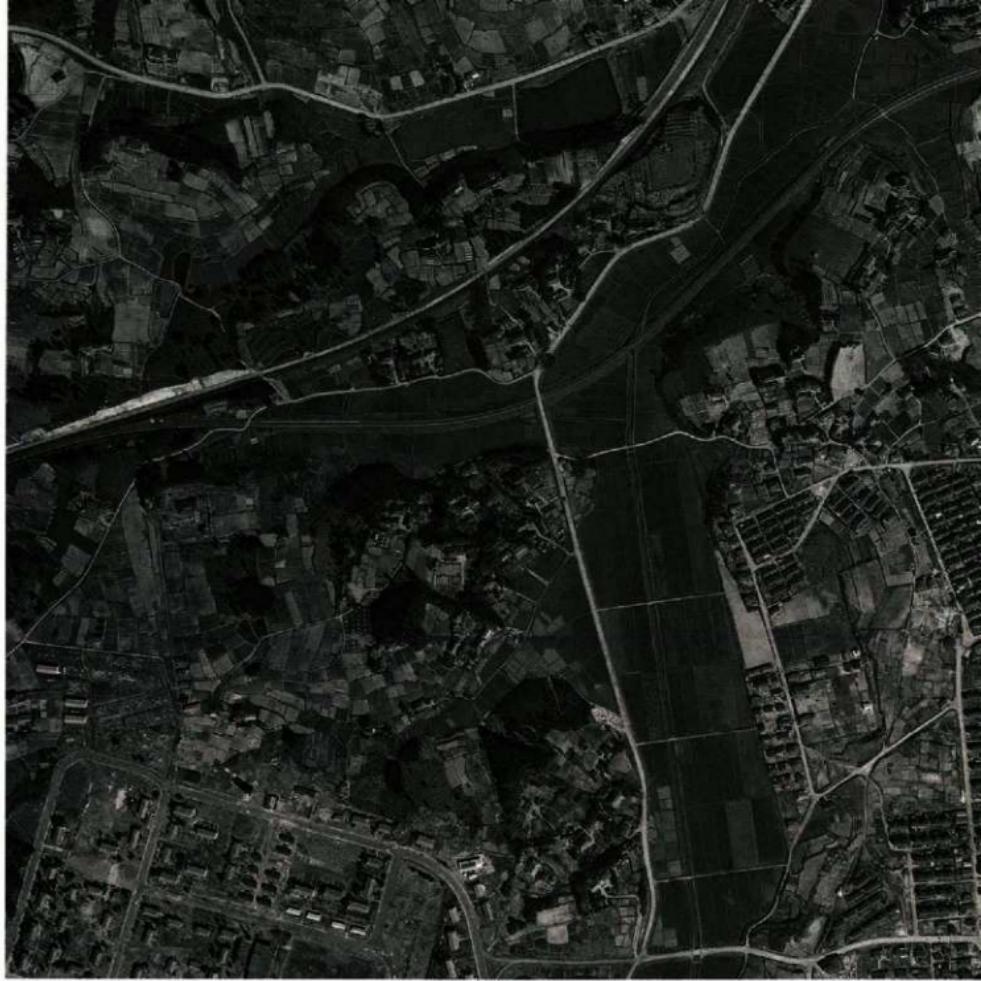
註 昭和59年11月の分布調査で確認している。第2次調査前に撤去。



方形であるところから人工的に造成された平場と考えられる(平場4)。この平場の北側の一段高い位置にも東西約20m、南北約25mの小規模な平場(平場5)が見られる。

以上のように、本遺跡には現在確認できるだけでも五つの平場が確認できる。平場5のように明確な区画施設を持たない平場はさらに周辺に存在する可能性がある。Na1地区で発見した土壙と溝については調査区の南側ではその痕跡が認められず、どのようにのびるものかは不明である。しかし、平場1～5との位置関係から館の西辺を区画する施設である可能性が大きいと考えられる。

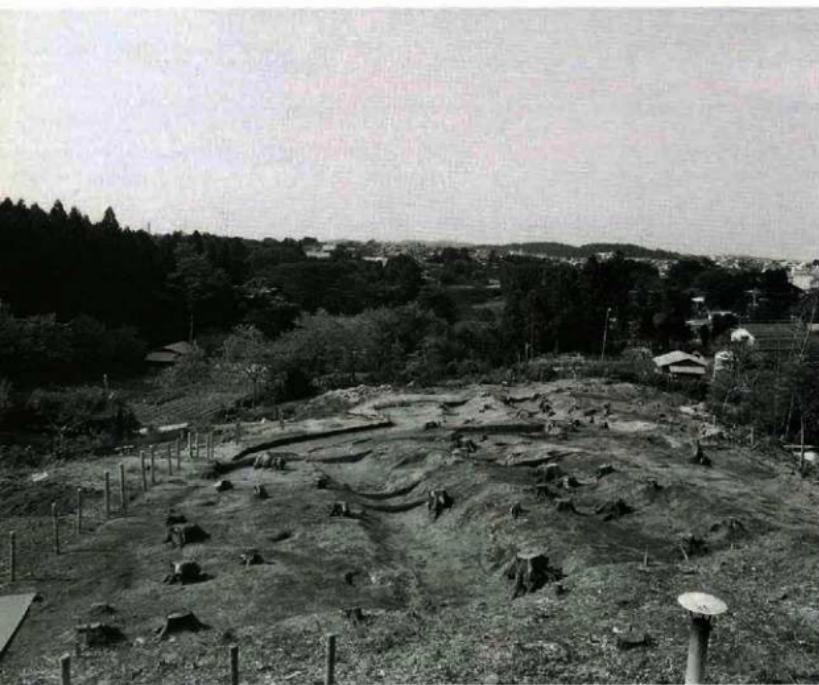
写 真 図 版



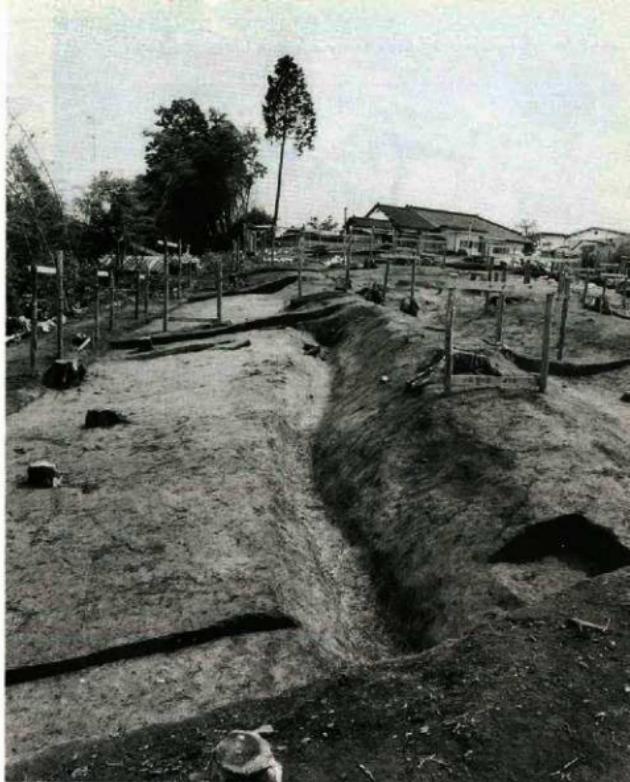
図版1
上：調査区航空写真（昭和36年撮影）
下：同 上（平成5年撮影）
●印が第3次調査区。下が第1次調査区

この空中写真是、建設省国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものであります。
(承認番号 平10東准第164号)

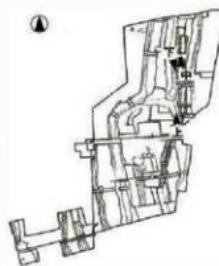
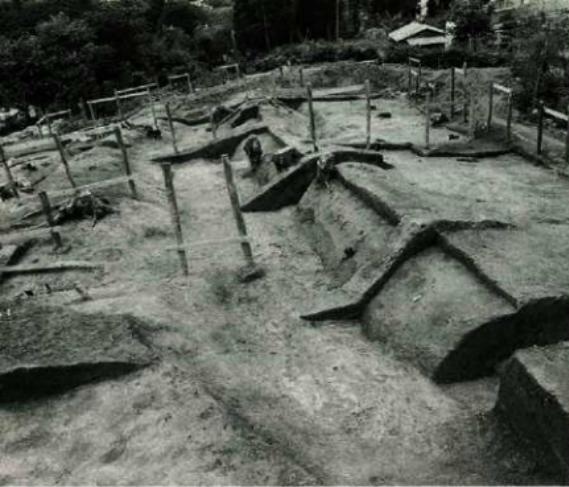




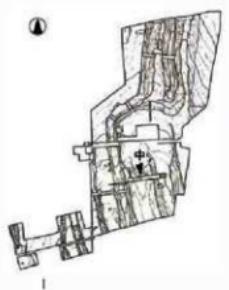
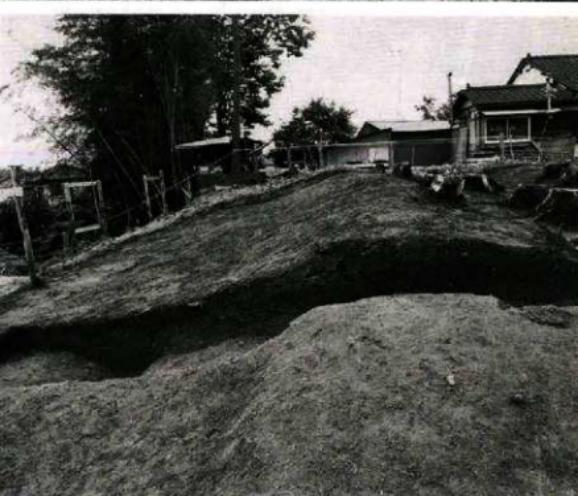
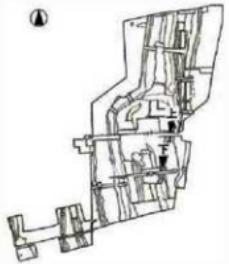
図版2 第1次調査 上：調査区全景（北より） 下：調査区全景（南より）



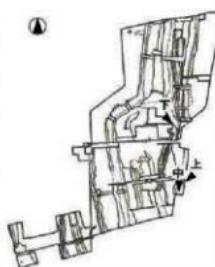
図版3 第1次調査
上：SD05（北より）
下：同上（南より）



図版4 第1次調査
上：SX02, SD07（南より）
中：SX02 A・B, SD07 A・B（南より）
下：SX02B, SD07B（北より）

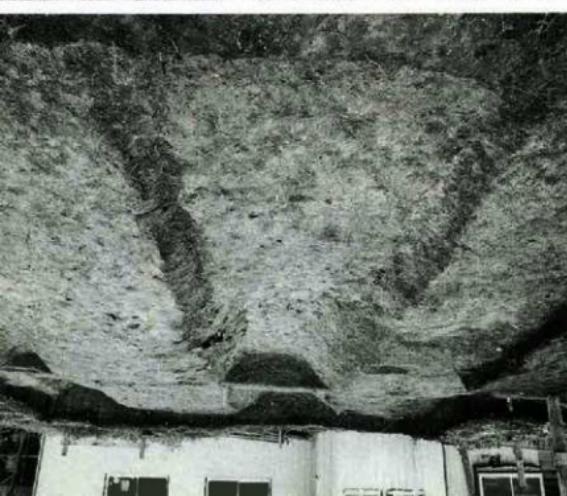
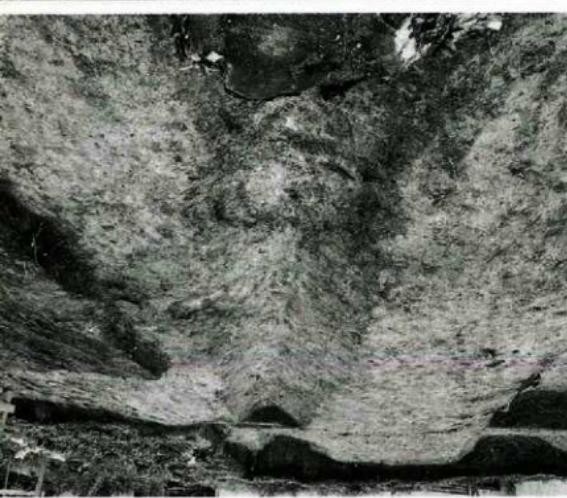
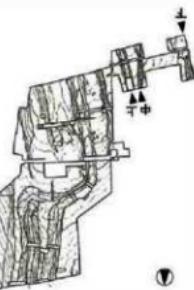


図版5 第1次調査
上：SD04, SD16（北より）
中：SX01, SD04（北より）
下：SD04土層堆積状況（北より）



図版6 第1次調査
上：SX20A（北東より）
中：同上土層堆積状況
下：SX06の下層の状況（北西より）

(上) SD10 (北之5)
中: SD11 (北之5)
(下) SD12 (北之5)

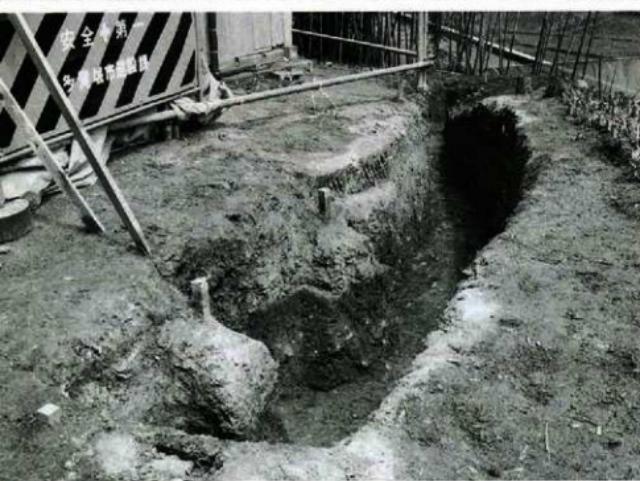
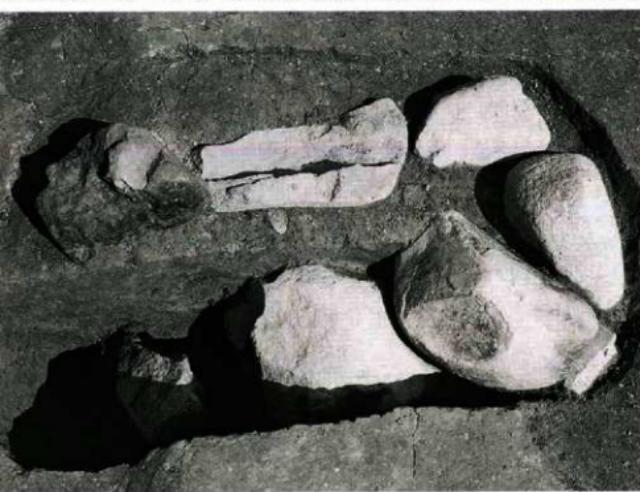




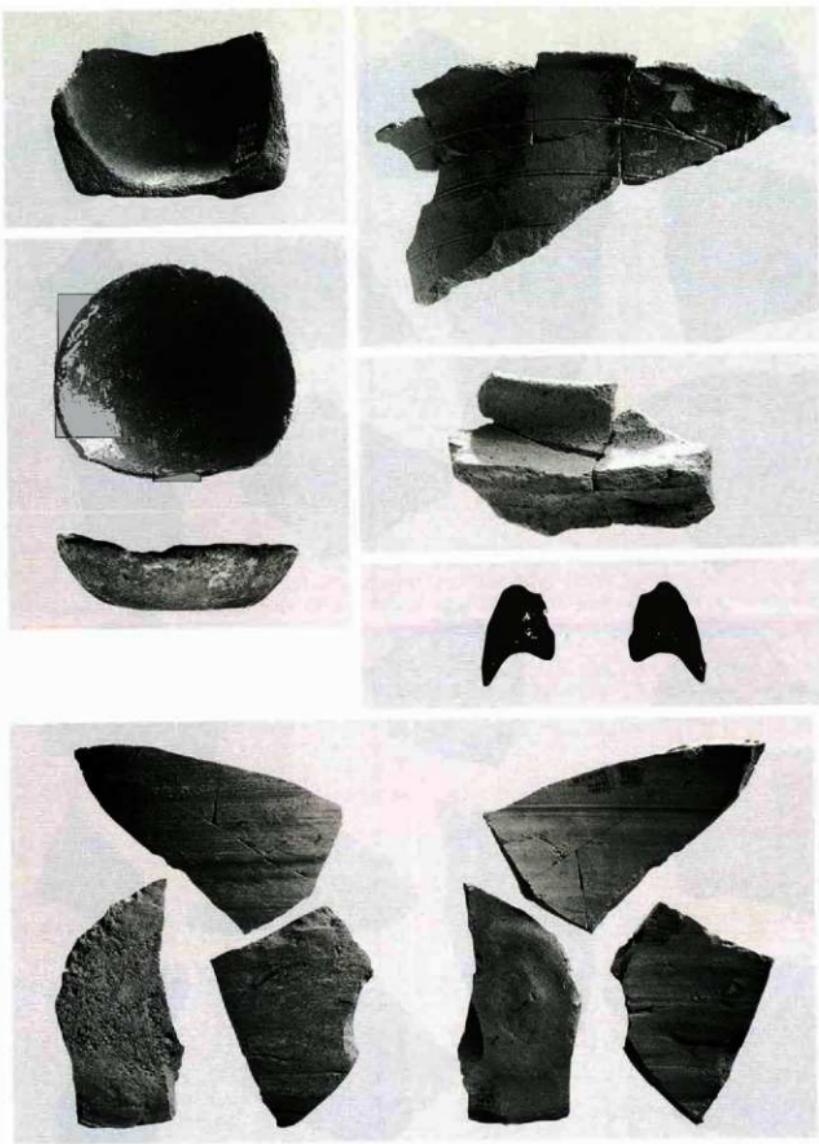
図版8 第1次調査
左上：SX14（南東より）
左中：同上（南より）
右上：SX14壁面の状況（北より）
右下：SX14土層堆積状況（南より）
左下：SX15（北より）



図版9 第3次調査
上：調査区全景（南より）
中：A区全景（南より）
下：B区全景（北より）

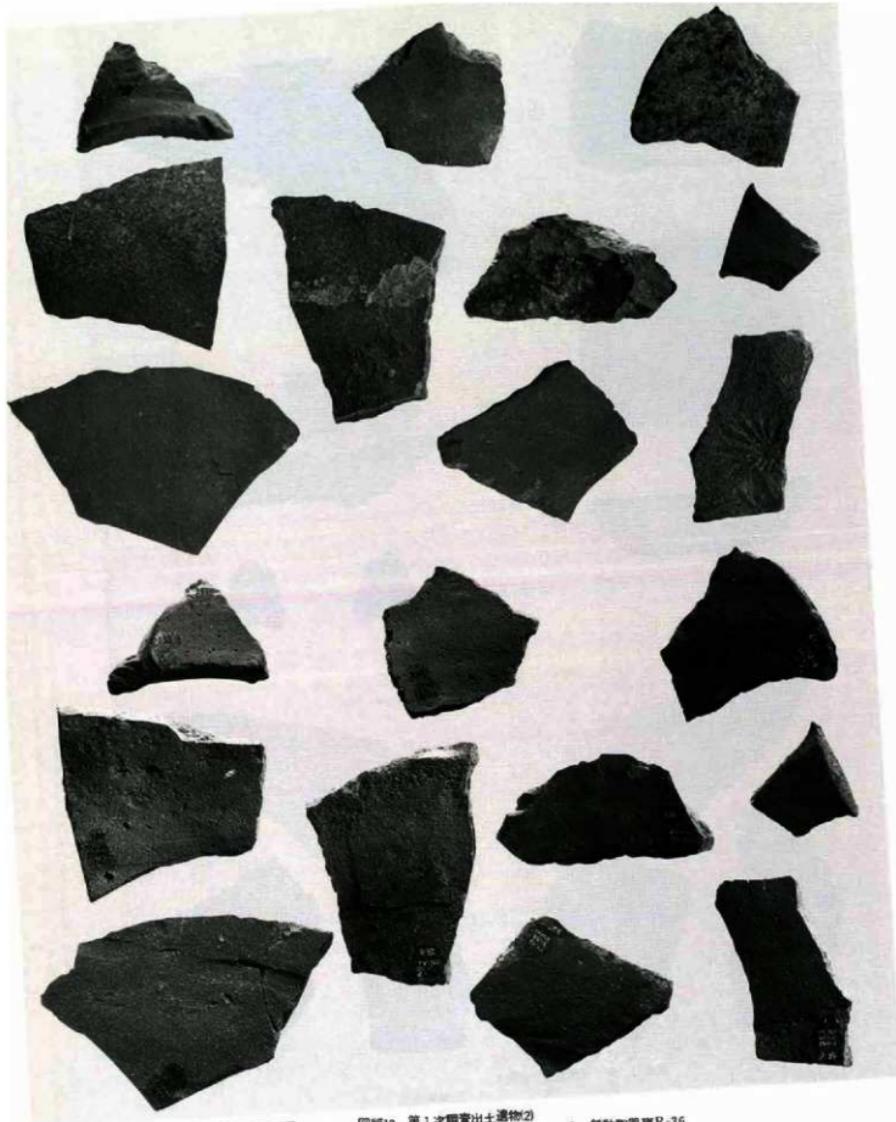


図版10 第3次調査
上：C区全景（南より）
中：SK96土壤断ち削り（西より）
下：D区全景（南より）



図版11 第1次調査出土遺物(1)

1	2			6	底脚陶器底	R-31
4				7	同上	R-44
3				8	同上	R-46
5						
6	6					
7	8	7	8			
				(1・4・5 S=½ 2 S=½ 3 S=½ 6・7・8 S=½)		



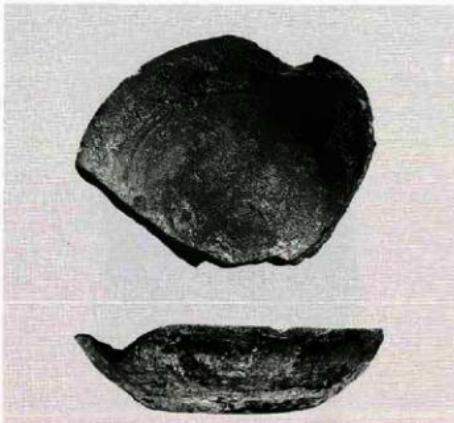
图版12 第1次调查出土遗物(2)

1	2	3
4	5	6 7
8	9	10

1	2	3
4	5	6 7
8	9	10

1	黑釉陶器盖	R-55	6	黑釉陶器底	R-36
2	同 上	R-23	7	同 上	R-35
3	黑釉陶器底	R-49	8	同 上	R-29
4	同 上	R-30	9	同 上	R-27
5	同 上	R-32	10	同 上	R-34

(5=14)

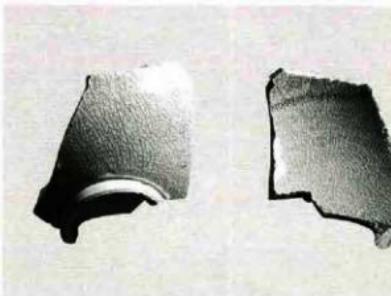
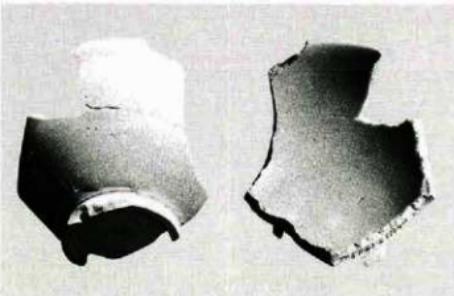


1	2
3	
4	
5	6

図版13 第3次調査出土遺物(1)

- | | | | |
|--------|-----|----------|------|
| 1 土師器杯 | R-1 | 4 染付磁器角皿 | R-8 |
| 2 同 上 | R-2 | 5 施釉陶器碗 | R-21 |
| 3 かわらけ | R-4 | 6 同 上 | R-22 |

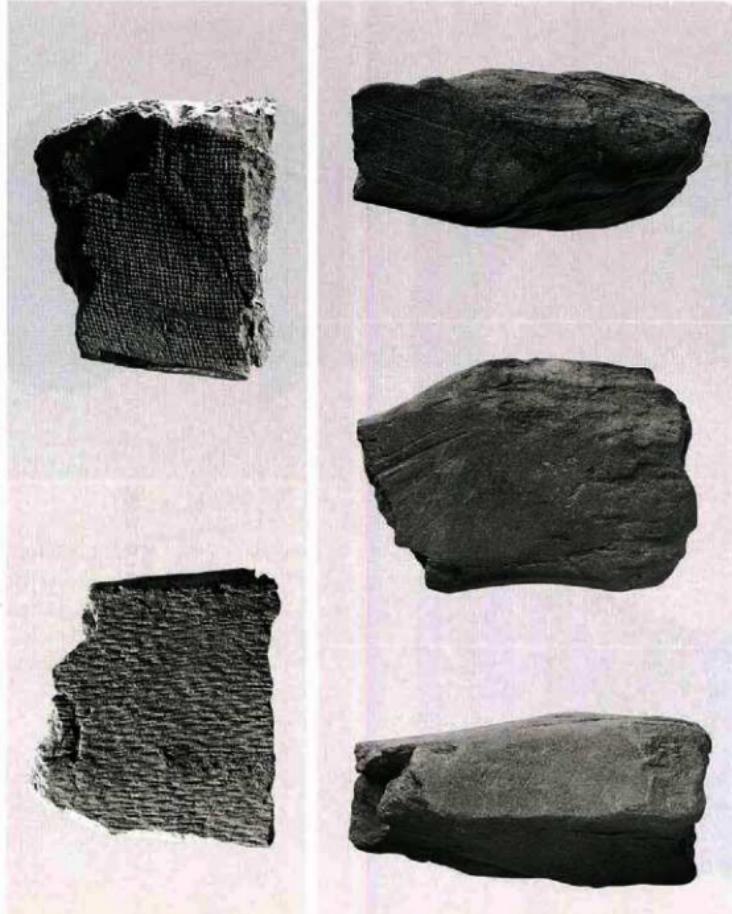
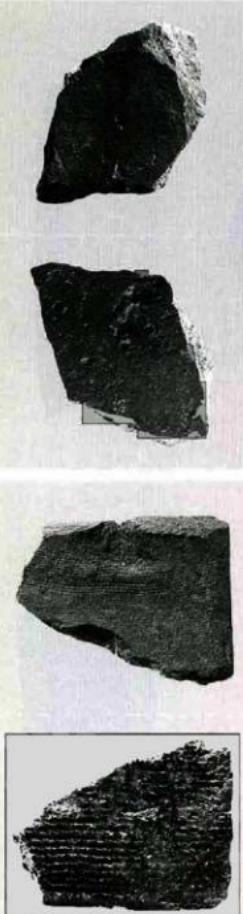
(1・5・6 S=16 2・4 S=16 3 S=17)



圖版14 第3次調查出土遺物(2)

1	2
3	4
3	4
4	4

- 1 平直 R-19
2 圓上 R-20
3 圓上 R-18
4 蛇形 R-9
(1 S=16 2•3•4 S=14)



報告書抄録

ふりがな	とめがや					
書名	留ヶ谷遺跡					
調査名	第1・3次調査					
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第48集					
編著者名	千葉季弥・高橋圭蔵・三浦幸子・草田敦・山川純一					
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター					
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 (022)-368-0134					
発行年月日	平成1998年3月25日					
所取遺跡	所在地	コート 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
留ヶ谷遺跡 (第1次)	多賀城市留ヶ谷1丁目 地内	18 048	38度 17分 53秒	141度 00分 30秒	19850424 ~ 19850703	1,300 宅地造成
留ヶ谷遺跡 (第3次)	多賀城市留ヶ谷1丁目 地内	18 048	38度 17分 55秒	141度 00分 30秒	19970411 ~ 19970626	200 道路拡幅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
留ヶ谷遺跡 (第1次)	城館	中世	土壙、溝、 土壤	無軸陶器		
留ヶ谷遺跡 (第3次)	無落	平安時代	土壤、溝			

多賀城市文化財調査報告書第48集

留ヶ谷遺跡

— 第1・3次調査報告書 —

平成10年3月25日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の呂西町4-5

電話 (022) 288-6123